

## 第3章 研究開発の効果と評価

- 1 コンピテンシーおよび課題研究に関するアンケートの分析
- 2 課題研究のルーブリックによる評価
- 3 クリティカルシンキングの項目反応理論(IRT)に基づく試験による評価
- 4 授業評価
- 5 学校評価
- 6 目標設定シートの到達度
- 7 運営指導委員会およびアドバイザー会議
- 8 5年間のまとめ

# 1 コンピテンシー分析及び課題研究に関する生徒アンケート分析

## 高校3年（SGH3期生）コンピテンシー分析

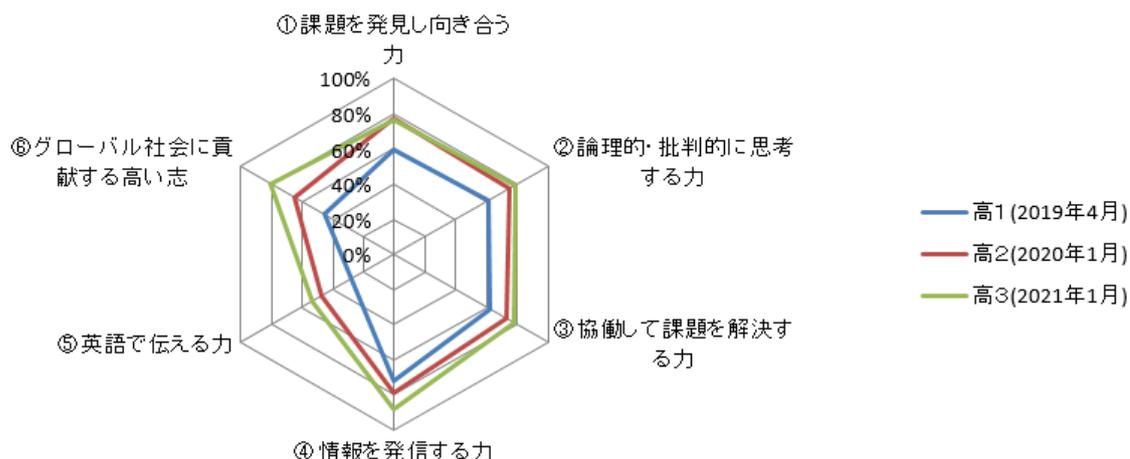
### （1）研究開発成果の検証、評価

成果の検証評価には（ア）本校入学時、（イ）高校2年1月、（ウ）高校3年1月の計3回実施した生徒対象アンケートを利用した。このアンケートは、本校が育成したい6つの力に関して39項目の質問があり、その肯定的な回答の割合（非常に当てはまる、かなり当てはまる、まあ当てはまる）の割合をまとめ、生徒らの課題研究及びCTPに関する事業への評価とした。その結果が次の図表1、図表2である。

図表1 2020年度3年(SGH3期生)における6つの力の比較

佐高SGHが伸ばしたい6つの力	1回目	2回目	3回目	3年間の伸び率
	高1 (2019年4月)	高2 (2020年1月)	高3 (2021年1月)	
①課題を発見し向き合う力	59.9%	77.3%	76.9%	17.0%
②論理的・批判的に思考する力	61.5%	74.8%	79.2%	17.7%
③協働して課題を解決する力	61.9%	73.2%	78.2%	16.3%
④情報を発信する力	71.8%	78.6%	88.1%	16.3%
⑤英語で伝える力	27.9%	47.9%	53.8%	25.9%
⑥グローバル社会に貢献する高い志	45.4%	64.6%	80.3%	34.9%

図表2 2020年度3年(SGH3期生) 6つの力肯定的な回答の割合



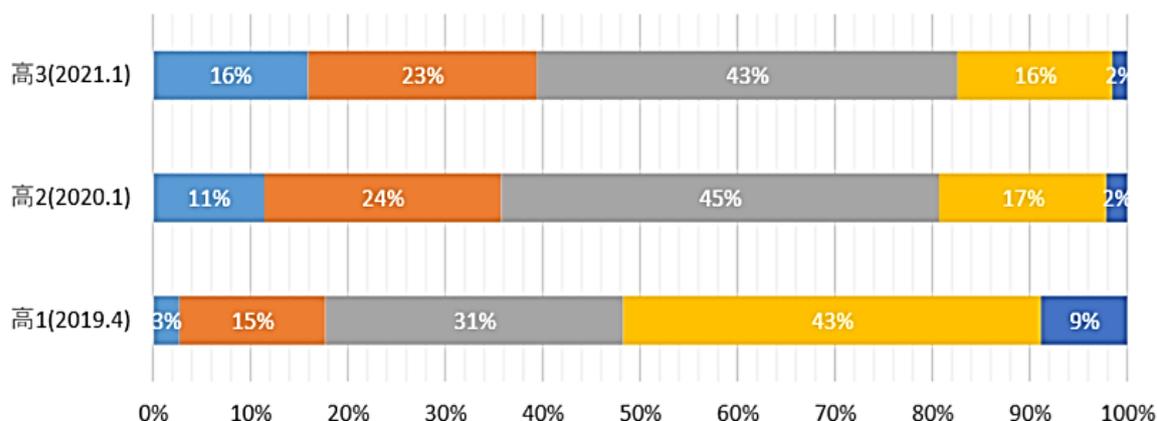
### （2）6つの力の評価

#### 1 課題を発見し向き合う力

課題を発見し向き合う力については、本校アンケート質問項目1～4が該当し、そのうち「非常に当てはまる、かなり当てはまる、まあ当てはまる」と肯定的回答したものを平均した。3学年を通して伸び率の上昇が認められる。高校1年次で課題研究の方法の基礎を身に付け、そのノウハウを活かして継続して高校2年次において発展した課題研究を生徒自ら行い、高校3年次において進路に基づいた振り返りを行った成果であると考え。特に、設問4「現状を分析し、課題を明らかにして提案することができる」の伸び率が34%の増加となっている。高校2年次においては、グローバルな視点で研究を行うことが求められており、高校1年次よりも更に広い視点で物事を視なければならず、自主的な研究を行うことが求められたということもこの伸び率に表れており、更に高校3年において、自分で進路を考えなければならぬときに、課題研究で養った力を改めて実感したと考えられる。

図表3 設問4 現状を分析し、課題を明らかにして提案することができる

■ 5 非常に当てはまる ■ 4 かなり当てはまる ■ 3 まあ当てはまる ■ 2 少し当てはまる ■ 1 まったく当てはまらない

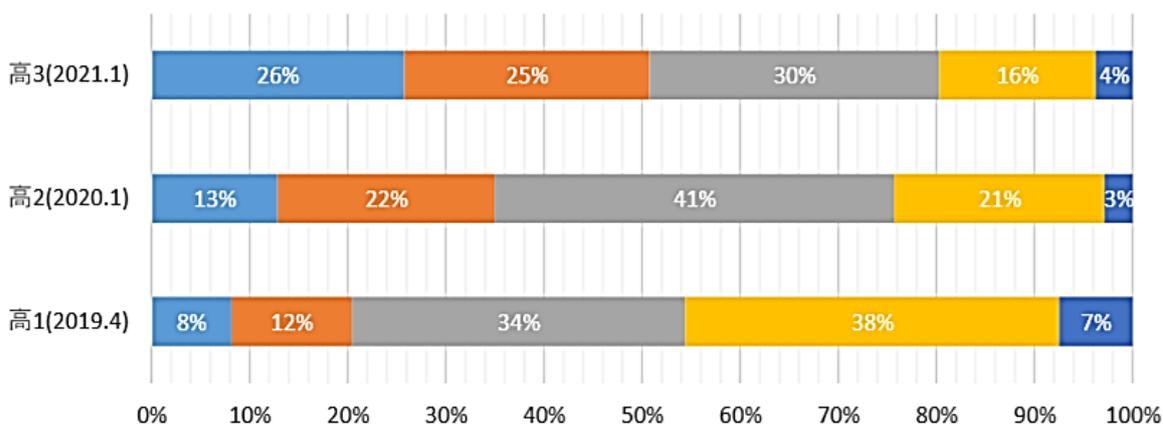


## 2 論理的・批判的に思考する力

論理的・批判的に思考する力に関しては、本校質問項目5～8が該当する。全体的に上昇しており、特に設問5「世界の出来事について、友達や家族、先生などとよく話し合っている」が27%、設問8「1つの視点ではなく、様々な視点から考えるのが好きである」の伸び率が26%と大きい。1の「課題を発見し向き合う力」の結果に付随するが、研究の視野が広がり、得た結果や考察を周りの人と共有しようとする考えが深まった結果であると考えられる。世界に視野を広げて進路を考察し、面談等の機会が増えて改めて自分の取り組んできた課題に向き合い、このような結果に表れたと言える。

設問8 1つの視点ではなく、様々な視点から考えるのが好きである

■ 5 非常に当てはまる ■ 4 かなり当てはまる ■ 3 まあ当てはまる ■ 2 少し当てはまる ■ 1 まったく当てはまらない

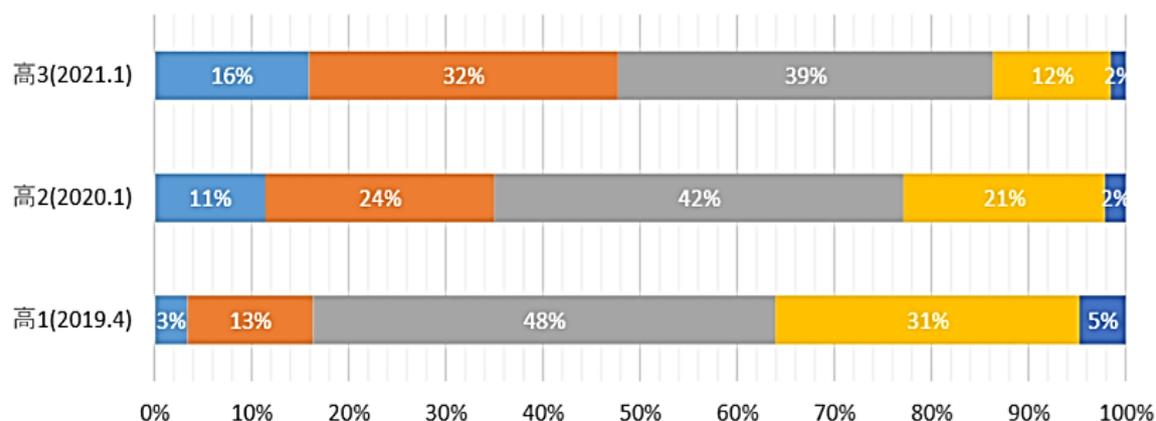


## 3 協働して課題を解決する力

協働して課題を解決する力に関しては、本校質問項目21～24が該当する。概ね同じような伸び率を示している。高校1年次から3年次にかけて課題研究を継続して行い、班と協力して課題研究を進めていくことの必要性を再認識した結果だと思われる。その中でも比較的高い伸び率を確認することができたのが、設問24「自分と異なる多様な人々と効果的に仕事ができる」である。良い研究を進めていくにあたって、この力は大変重要である。異なる意見があるからこそ、物事を多面的にとらえて考察できる。2年次から3年次にかけても上昇していることから、冷静に物事を判断する能力がこの3年間で大きくつけることができたと思われる。

#### 設問 2 4 自分と異なる多様な人々と効果的にしごとができる

■ 5 非常に当てはまる ■ 4 かなり当てはまる ■ 3 まあ当てはまる ■ 2 少し当てはまる ■ 1 まったく当てはまらない

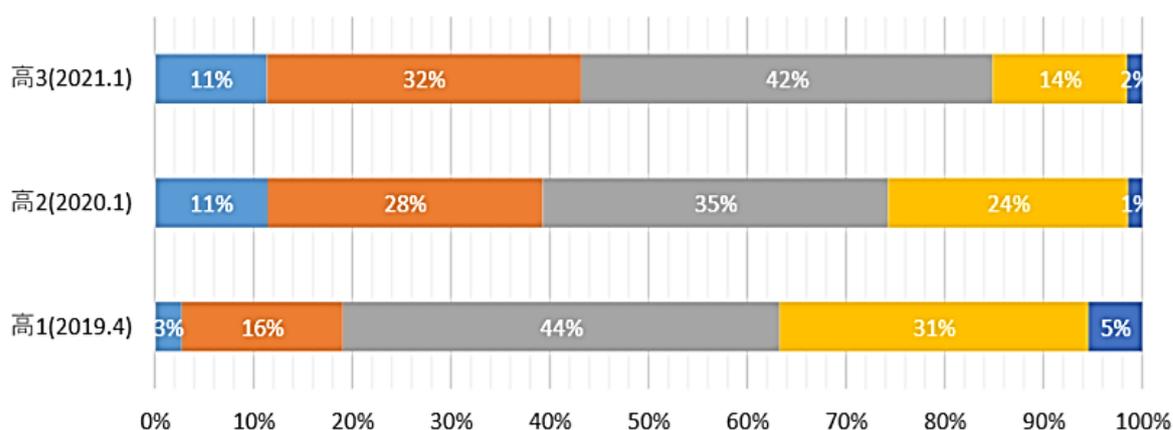


#### 4 情報を発信する力

情報を発信する力に関しては、本校質問項目 25～27 が該当する。全体的に上昇しているが、特に設問 27 「自分の考えを相手に理解してもらい、伝えることができる」の伸び率が 22% と大きかった。これは、1、2 学年同様グループのメンバー間の意思疎通もあるが、中間発表や領域別発表会など自分の言いたいことを伝えなければならない機会が多いことが理由としてあげられる。また、外部と連絡を取って実際にフィールドワークへ行く等、積極的に自分から動いて情報を集めることを行った成果であると考えられる。更に 3 年次においてそれまでのスキルを生かし、自ら進路選択のために情報を収集できる力を改めて実感したと考えられる。今後社会へ出ていく若い世代にとって、大変必要なスキルをこの S G H 事業で身に付けることができたというところができる。

#### 設問 2 7 自分の考えを相手に理解してもらい、伝えることができる

■ 5 非常に当てはまる ■ 4 かなり当てはまる ■ 3 まあ当てはまる ■ 2 少し当てはまる ■ 1 まったく当てはまらない



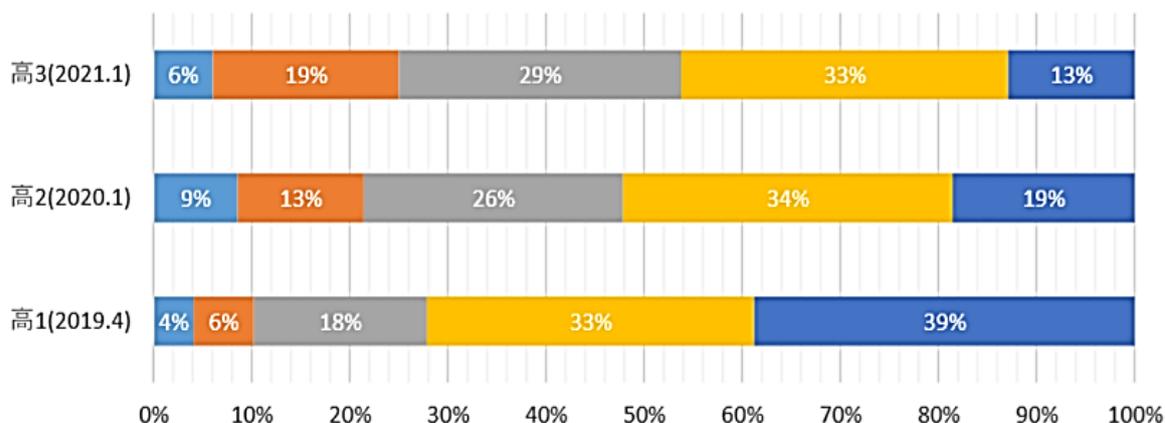
#### 5 英語で伝える力

英語で伝える力に関しては、本校質問項目 28 が該当する。例年この質問に対する解答は伸び悩みを見せるなか、今年度の 3 学年においては 26% の上昇と大変大きな伸び率を示した。2 学年次の修学旅行では、台湾の高雄女子高級中学で、全員が英語のプレゼンテーションを行うといった新たな取り組みを行った。その過程において、生徒たちは英語の教員とコンタクトをとる回数が増え、その結果自分で英語の能力が上がってきたと考えた生徒が増えた。また、そこで養ったスキルを持って 3 学年に受験勉強で英語に触れる機会

がさらに増え、全体の英語に対する意識の向上が見られたと考えられる。今後グローバルなリーダーを育てる上で、大変意義のある結果となった。

**設問 2 8 自分の考えを英語でプレゼンすることができる**

■ 5 非常に当てはまる ■ 4 かなり当てはまる ■ 3 まあ当てはまる ■ 2 少し当てはまる ■ 1 まったく当てはまらない

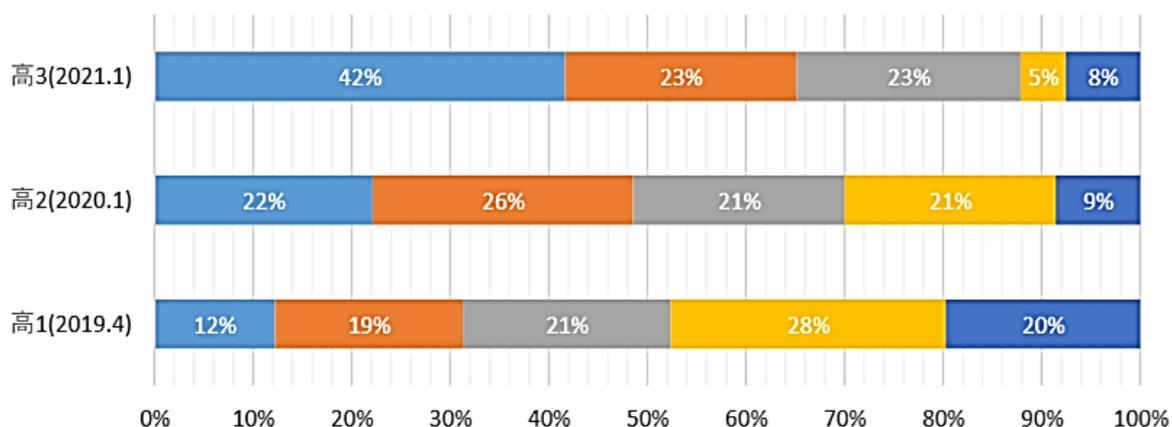


**6 グローバル社会に貢献する高い志**

グローバル社会に貢献する高い志に関しては、本校質問項目 3 2、3 9 が該当する。どちらも約 3 5 % という高い伸び率を示している。設問 3 2 「将来は地元地域や世界でグローバルに活躍したい」については、実際に修学旅行で台湾という外国に行ったことが大きい。先述した通り、今年度は高雄高級女子中学との交流を新たに行った。この時、英語での自主的交流が求められた。生徒によっては、初めての外国で世界共通語とも言える英語の重要性を認識した者も多かったのではないだろうか。ただ 2 学年次から 3 学年次で大きく上昇したのは設問 3 9 「社会に貢献するため、大学で取り組みたい分野や課題が決まっている」であり、1 8 % も上昇して全体の 8 8 % がポジティブな回答をした。進路が決まってきたという捉え方もできるが、この 3 年間に渡る S G H 事業において生徒自身の考えに変化が出て具体的に取り組みたいことを考えるようになったということであることを確信させる結果となった。

**設問 3 2 社会に貢献するため、大学で取り組みたい分野や課題が決まっている。**

■ 5 非常に当てはまる ■ 4 かなり当てはまる ■ 3 まあ当てはまる ■ 2 少し当てはまる ■ 1 まったく当てはまらない



## 高校2年（SGH4期生）コンピテンシー分析

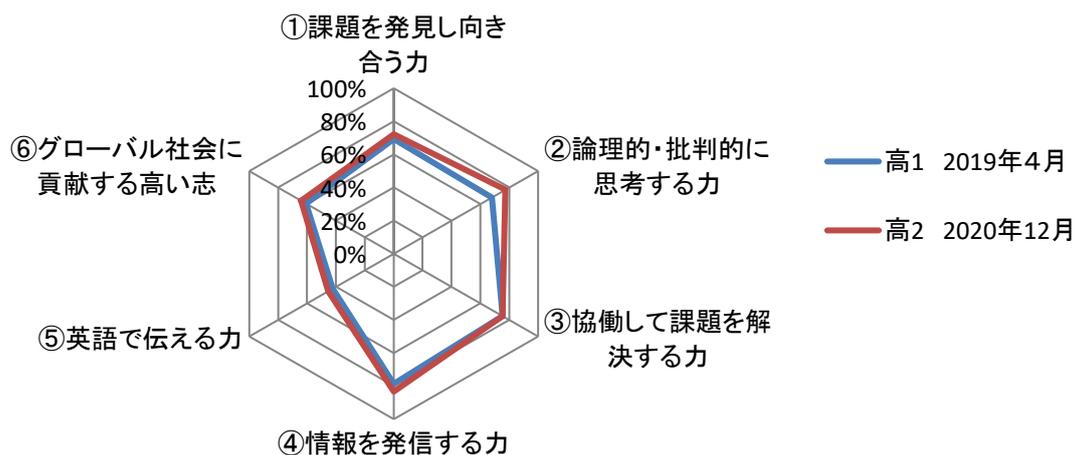
### （1）研究開発成果の検証、評価

成果の検証評価には（ア）高校1年12月、（イ）高校2年12月に実施した生徒対象アンケートを利用した。このアンケートは、本校が育成したい6つの力に関して39項目の質問があり、その肯定的な回答の割合（非常に当てはまる、かなり当てはまる、まあ当てはまる）の割合をまとめた。多くの項目でマイナスの伸びをみせたが、今年度は個人研究であり、研究を協働しなければそれぞれの力が伸びないことが分かった。その結果が次の図表1、図表2である。

図表1 2020年度2年（SGH4期生）における6つの力の比較

佐高SGHが伸ばしたい6つの力	高1 (2019年4月)	高2 (2020年12月)	伸び率
①課題を発見し向き合う力	69%	72%	3%
②論理的・批判的に思考する力	68%	77%	9%
③協働して課題を解決する力	75%	75%	0%
④情報を発信する力	79%	83%	5%
⑤英語で伝える力	42%	45%	3%
⑥グローバル社会に貢献する高い志	61%	64%	3%

図表2 2020年度2年（SGH4期生）6つの力肯定的な回答の割合

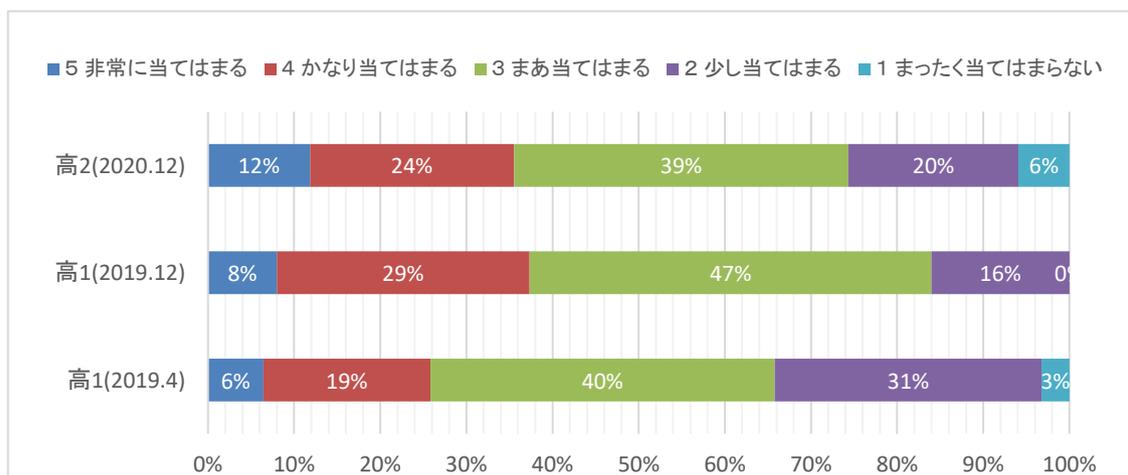


### （2）6つの力の評価

#### 1 課題を発見し向き合う力

課題を発見し向き合う力については、本校アンケート質問項目1～4が該当し、そのうち「非常に当てはまる、かなり当てはまる、まあ当てはまる」と肯定的回答したものを平均した。全体において伸び率の上昇が認められる。これは高校1年次で課題研究の方法の基礎を身に付け、そのノウハウを活かして継続して高校2年次において発展した課題研究を生徒自ら行っている成果であると考えられる。特に、設問1「計画を立てて行動することができる」の伸び率が9%の増加となっている。高校2年次においては、個人研究で進めていかなければならず、能動的にグローバルな視点で研究を行うことが求められた。高校1学年次よりも更に広い視点で物事を視なければならず、自主的な研究を行うことが求められたということもこの伸び率に表れている。

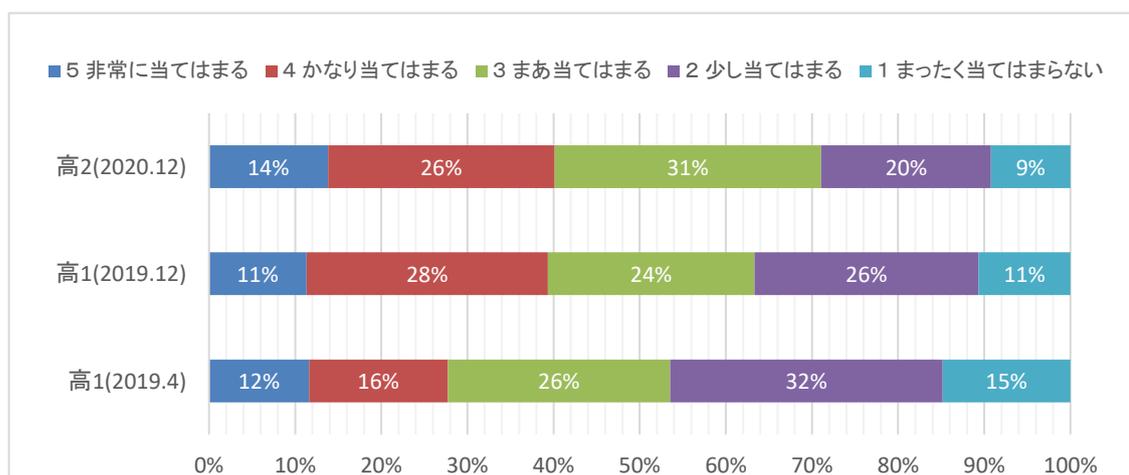
図表3 設問1 計画を立てて行動することができる



## 2 論理的・批判的に思考する力

論理的・批判的に思考する力に関しては、本校質問項目5～8が該当する。全体的に上昇しており、特に設問5「世界の出来事について、友だちや家族、先生などによく話し合っている」の伸び率が18%と大きい。1の「課題を発見し向き合う力」の結果に付随するが、研究の視野が明らかに広がっているという結果であると考えられる。地域密着の研究から、世界に視野を広げて研究を自主的に行っていることが分かる。また設問7「疑問点が出たら、本屋インターネットなどですぐ調べる」の伸び率が9%と比較的高いことから、問題解決へ論理的に判断することができるようになってきている。

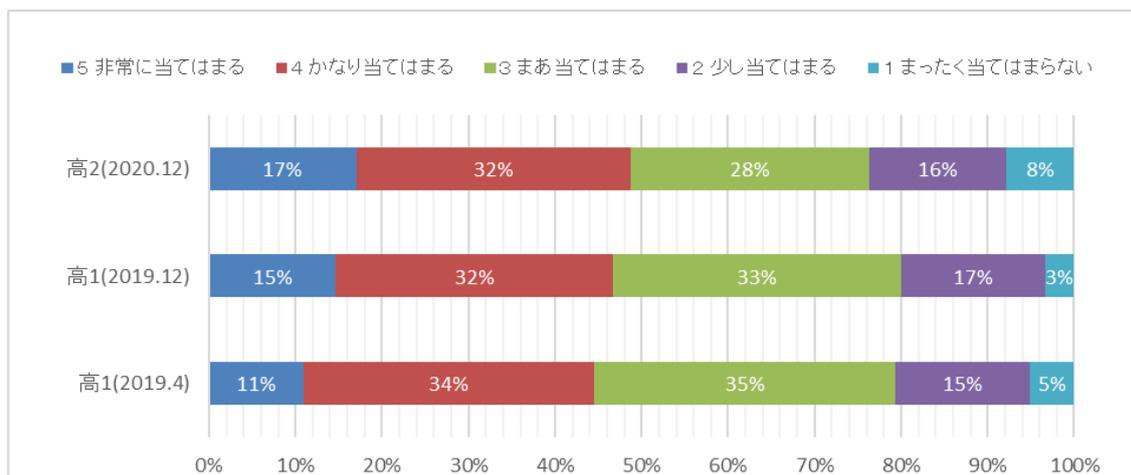
図表4 設問5 世界の出来事について、友だちや家族、先生などによく話し合っている



## 3 協働して課題を解決する力

協働して課題を解決する力に関しては、本校質問項目21～24が該当する。概ね同じような伸び率を示している。高校1年次から2年次にかけて、研究内容は異なるが、課題研究を継続して行い、課題研究を進めていくことの必要性を再認識した結果だと思われる。その中でも比較的高い伸び率を確認することができたのが、設問21「目的に向かって、周囲の人々を動かしている」が4%上昇し、設問24の「自分と異なる多様な人々と効果的に仕事ができる」も3%の上昇をしている。良い研究を進めていくにあたって、この力は大変重要である。異なる意見があるからこそ、物事を多面的にとらえて考察できる。その点が、この2年間で行ってきた課題研究の成果であると考えられる。

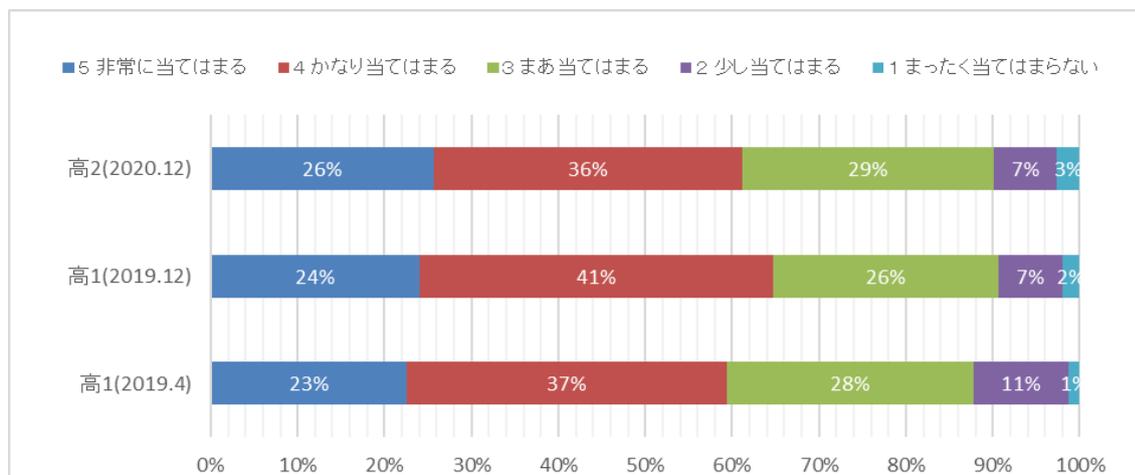
## 設問22 みんなのことを考えて、仲間に助言や、時には注意ができる



### 4 情報を発信する力

情報を発信する力に関しては、本校質問項目25～27が該当する。全体的に上昇しているが、特に設問27「自分の考えを相手に理解してもらい、伝えることができる」の伸び率が8%と大きかった。これは個人研究となり、中間発表や領域別発表会などで自分の言いたいことを、自らが他者へ伝えなければならない機会が多いことが理由としてあげられる。また、外部と連絡を取って実際にフィールドワーク・インタビュー等、積極的に自分から動いて情報を集めることを行った成果であると考えられる。今後社会へ出ていく若い世代にとって、大変必要なスキルをこのSGH事業で身に付けることができる。

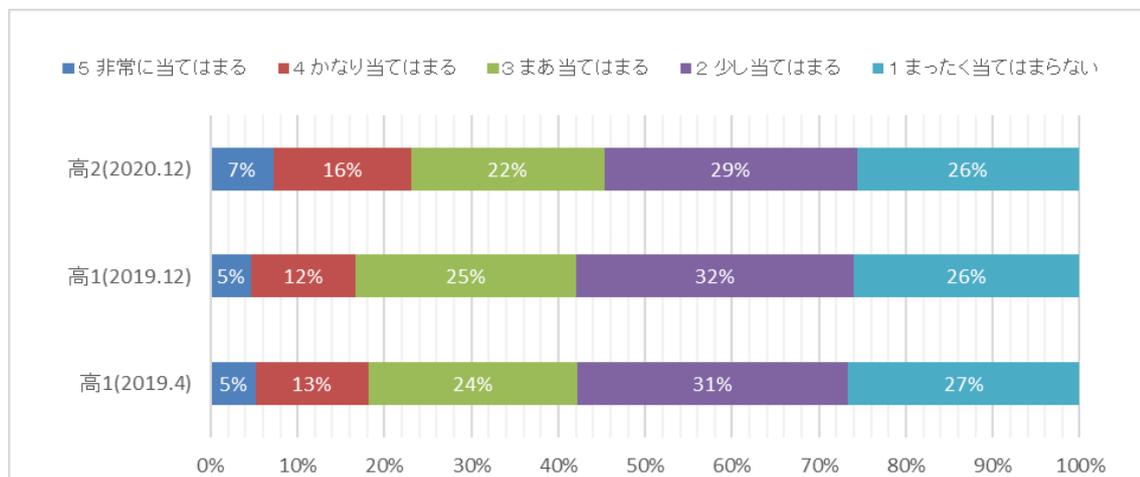
## 設問26 相手の考えや立場を理解し、尊重することができる



## 5 英語で伝える力

英語で伝える力に関しては、本校質問項目28が該当する。例年この質問に対しての解答は伸び悩みを見せるなか、今年度の2学年においては3%の伸び率を示した。今年度、台湾修学旅行に参加することができず、英語での発表会を行うことはできなかった。しかし、英語の授業にて発表することに取り組み、生徒全員が英語のプレゼンテーションを行うといった新たな取り組みを行った。その過程において、生徒たちは英語の教員とコンタクトをとる回数が増え、その結果自分で英語の能力が上がってきたと考えた生徒が増えたためと思われる。生徒にとって英語のプレゼンテーションは、かなりハードルの高いものであったと思われるが、それによって得た経験値は大変大きなものであったと考えられる。

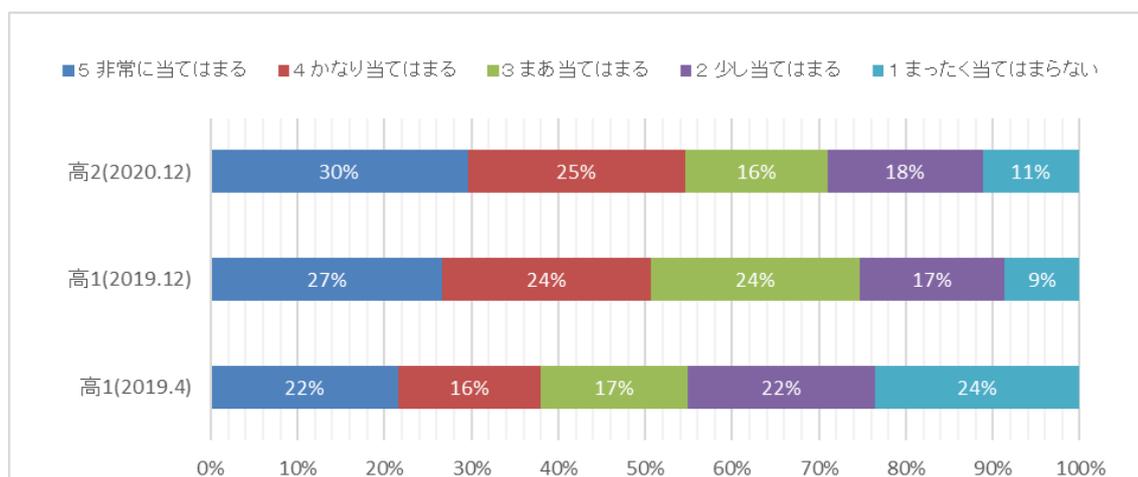
### 設問28 自分の考えを英語でプレゼンすることができる



## 6 グローバル社会に貢献する高い志

グローバル社会に貢献する高い志に関しては、本校質問項目32、39が該当する。設問32「将来は地元地域や世界でグローバルに活躍したい」については、66%から57%に減少し、修学旅行で台湾という外国に行けなかったことが大きいのではないかと感じる。設問39「社会に貢献するため、大学で取り組みたい分野や課題が決まっている」は、55%から71%へ16%上昇した。もちろん高校1年次から2年次の比較であるので、自然と進路が決まってきたという捉え方もできるが、この2年間に渡るSGH事業において生徒自身の考えに変化が出て具体的に進路を考えるようになったということも十分に考えられる。

### 設問39 社会に貢献するため、大学で取り組みたい分野や課題が決まっている



## 高校1年（SGH5期生）コンピテンシー分析

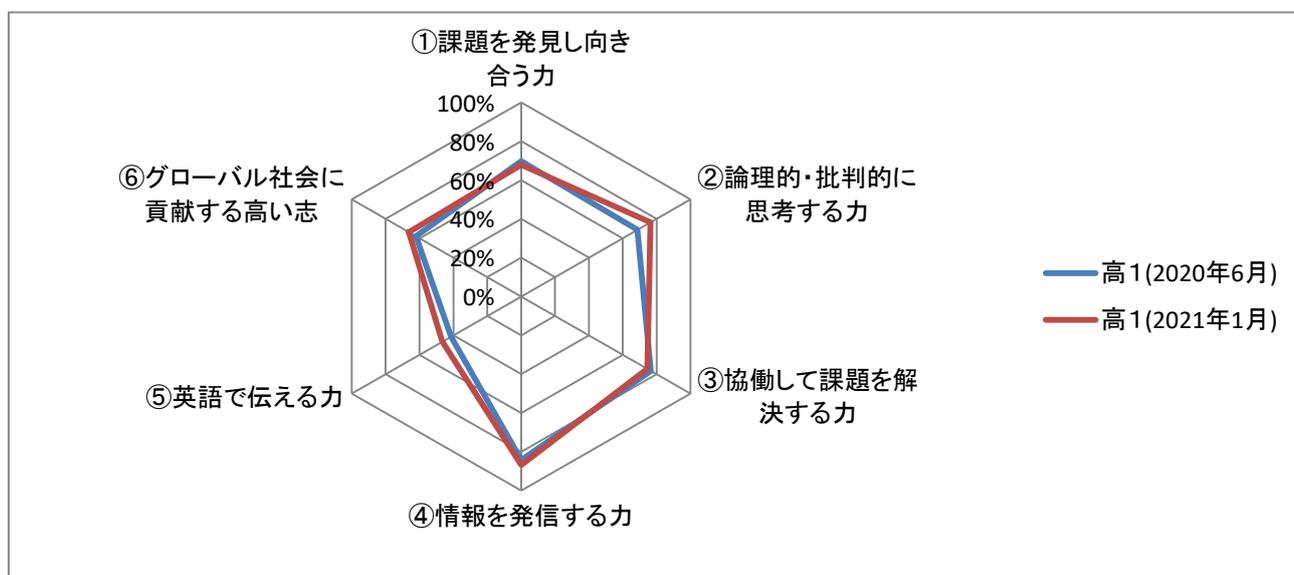
### （1）研究開発成果の検証、評価

成果の検証評価には（ア）本校高校1年6月時、（イ）高校1年1月の計2回実施した生徒対象アンケートを利用した。このアンケートは、本校が育成したい6つの力に関して39項目の質問があり、その肯定的な回答の割合（非常に当てはまる、かなり当てはまる、まあ当てはまる）の割合をまとめ、生徒らの課題研究及びCTPに関する事業への評価とした。その結果が次の図表1、図表2である。

図表1 2020年度1年（SGH5期生）における6つの力の比較

佐高SGHが伸ばしたい6つの力	高1(2020年6月)	高1(2021年1月)	伸び率
①課題を発見し向き合う力	70%	68%	-2%
②論理的・批判的に思考する力	69%	76%	7%
③協働して課題を解決する力	77%	74%	-3%
④情報を発信する力	84%	87%	3%
⑤英語で伝える力	41%	47%	6%
⑥グローバル社会に貢献する高い志	62%	66%	4%

図表2 2020年度1年（SGH5期生） 6つの力肯定的な回答の割合

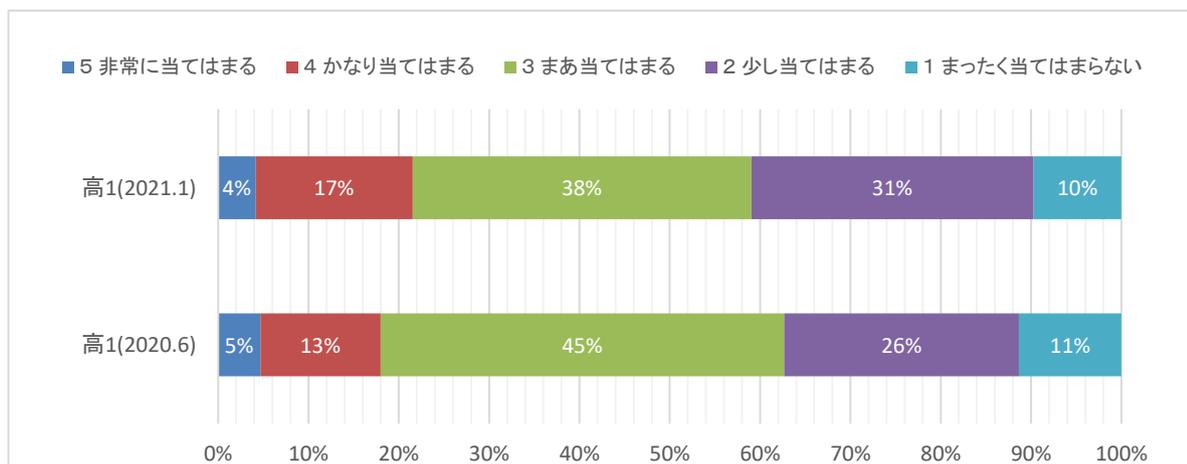


### （2）6つの力の評価

#### 1 課題を発見し向き合う力

課題を発見し向き合う力については、本校アンケート質問項目1,2,3,4が該当し、そのうち「非常に当てはまる、かなり当てはまる、まあ当てはまる」と肯定的回答したものを平均した。本校がつけた6つの力のうち2つがマイナスの伸び率となっており、今年度の新型コロナウイルス感染拡大の影響が大きく出ている。課題を発見し向き合う力としては、4項目のうち「設問1 計画を立てて行動することができる」が-2%（63%→59%）となり、マイナスを経験するのは、この5年間で初めてとなっている。4月、5月の休業後に、計画を建て直したものの、時間もかかりFWは実施できるかなど教員、生徒ともに先が見えない状態が長かったことが理由の一つではないだろうか。

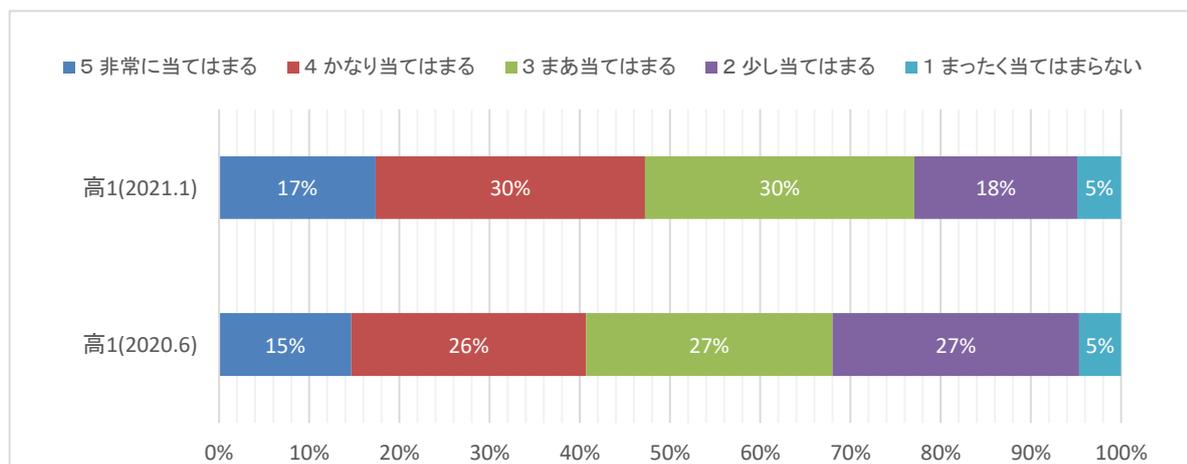
図表3 設問1 計画を立てて行動することができる



### 2 論理的・批判的に思考する力

論理的・批判的に思考する力に関しては、本校質問項目5,6,7,8が該当し、6月と1月の比較では肯定的回答が全体として7%の伸びを見せた。その4つの項目の中でも2項目の「設問7 疑問点が出てきたら、本やインターネットなどですぐ調べる」と「設問8 1つの視点でなく、様々な視点から考えるのが好きである」は9%の伸び率を見せた。情報をすぐに手に入れ、さらに手に入れた情報に対して批判的多元的に思考しようとする力がついてきていると言える。

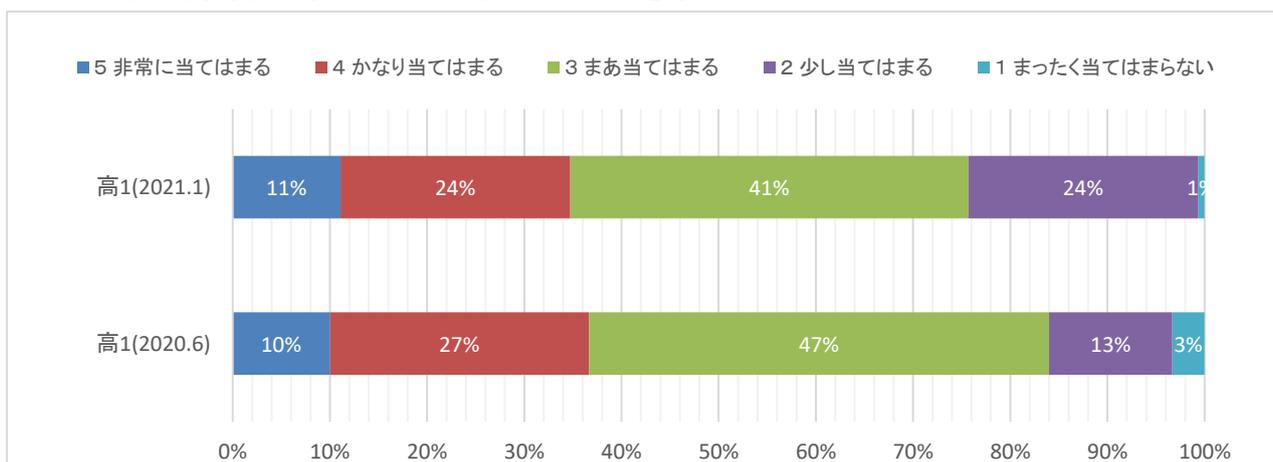
図表4 設問7 疑問点が出てきたら、本やインターネットなどですぐ調べる



### 3 協働して課題を解決する力

協働して課題を解決する力に関しては、本校質問項目21,22,23,24が該当し、6月と1月の比較では肯定的回答が-3% (77%→74%) となってしまった。まず、今回の総合的な探究の時間における主たる研究がグループ研究から個人研究になったことが大きな原因の1つと思われる。6月に研究を始めるにあたり、授業形態がグループ活動をよしとしなかった等により大きな決断として個人研究を選択したわけだが、その影響はかなりのものとなった。特に「設問24 自分と異なる多様な人々と効果的にしごとができる」においては、肯定的回答の割合が-8% (84%→76%) となり、実際に協働研究ができないと生徒たちの意識が下がってしまうことが明らかになった。

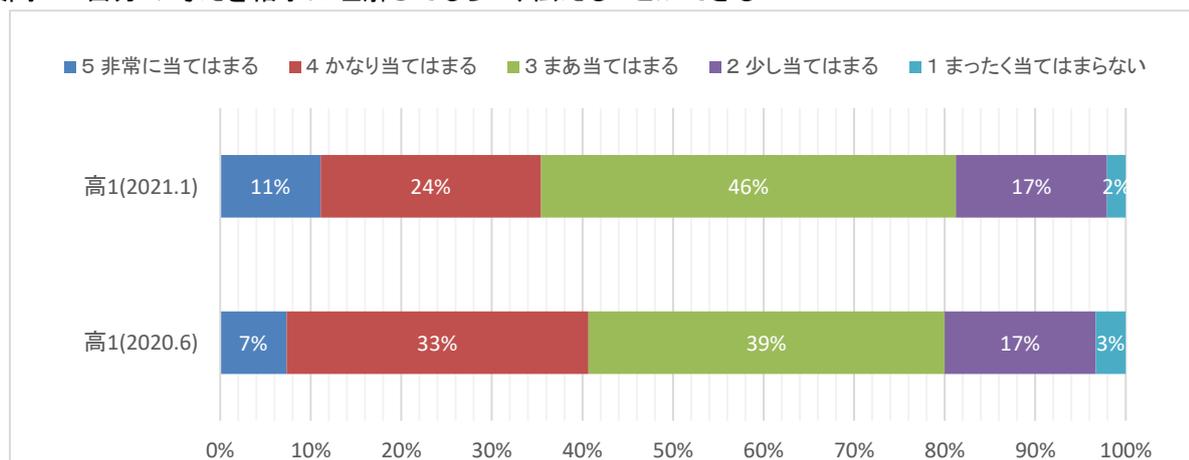
#### 設問24 自分と異なる多様な人々と効果的にしごとができる



#### 4 情報を発信する力

情報を発信する力に関しては、本校質問項目25,26,27が該当し、6月と1月の比較では肯定的回答が3%増加した。設問25の「相手の考えを引き出して、よく聴くことができる」はかろうじて6%の増加を示しているが、設問27の「自分の考えを相手に理解してもらい、伝えることができる」を見ると1%の増加となっており、6月と1月でほぼ変わらない肯定的意見の割合となっている。しかし、さらに細かく見ると「かなり当てはまる」と回答した生徒の割合は-7%（33%→24%）となっており、情報を発信する力は必ずしも良くなっているとは言えず、「かなり当てはまる」と回答した生徒が減ってしまった理由を考えると、中間発表や課題研究発表会等をまだ経験することができず、自信をまだつけることができなかつたからではないだろうか。

#### 設問27 自分の考えを相手に理解してもらい、伝えることができる



## 5 英語で伝える力

英語で伝える力に関しては、本校質問項目28が該当し、6月と1月との比較では肯定的回答の割合が5%増加している。これについては、1年生が10月に英語科と共同で英語プレゼンコンテストを実施したことが大きな理由の一つと考えられる。しかし、「かなり当てはまる」と回答した生徒の割合を見ると3%（13%→10%）減少しており、英語プレゼンコンテストを1回実施するだけでは不十分であることがわかる。今後は英語科との連携を強くし、英語で伝える力をつけるため改善を図っていく必要がある。

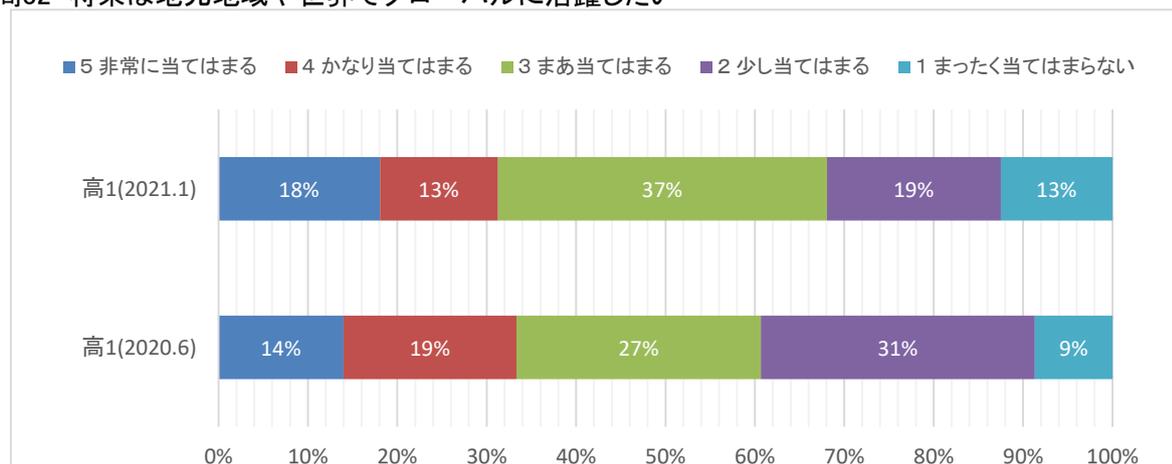
### 設問28 自分の考えを英語でプレゼンすることができる



## 6 グローバル社会に貢献する高い志

グローバル社会に貢献する高い志に関しては、本校質問項目32,39が該当し、6月と1月の比較では肯定的回答が4%（62%→66%）増加した。項目別にみると、設問32の「将来は地元地域や世界でグローバルに活躍したい」は、肯定的回答が7%（61%→68%）増加したが、設問39「社会に貢献するため、大学で取り組みたい分野や課題が決まっている」は1%（64%→65%）の増加となっており、ほぼ変化なしとなった。回答の割合を見ると、この2つの設問とも「かなり当てはまる」の回答の割合が減少し、「まあ当てはまる」の割合が多くなっているところが懸念され、この時点では課題研究があまり進んでいないことが大きな理由の1つと考えられる。この後、生徒たちは中間報告会（中間発表から変更）を経て、課題研究発表会を実施したがそれ以前のアンケートとなっており、生徒たちの意志が段々と固まり始めている頃であったと推察される。

### 設問32 将来は地元地域や世界でグローバルに活躍したい



## 2 課題研究のルーブリックによる評価

2月2, 3日に開催したSGH課題研究成果発表会(高1, 2年生全生徒が発表)を、生徒同士で、またその分科会に2名ずつ参加した教員から、それぞれ同じルーブリックを用いて評価、点数化した。

### (1) ルーブリックの概要

#### ア 本校独自の作成

本校が独自に作成したものである。縦軸に評価したい項目を、横軸にその達成度(最大値4)を表したものである。今年度は、チーム研究ではなく個人研究ということもあり例年と仕様を変えているため、結果を過年度と比較することはできない。ただ、最大値のレベル4は、高校生に理想をさし示したものである。したがって、生徒には4段階のうちレベル2が付けば十分 good の評価であることを説明している。

#### イ 高2ルーブリックの評価項目

提言力(評価項目のうち①~④)

① ポスターの見やすさ ② 背景・目的 ③ 研究手法 ④ 研究結果

表現力(評価項目のうち⑤~⑧)

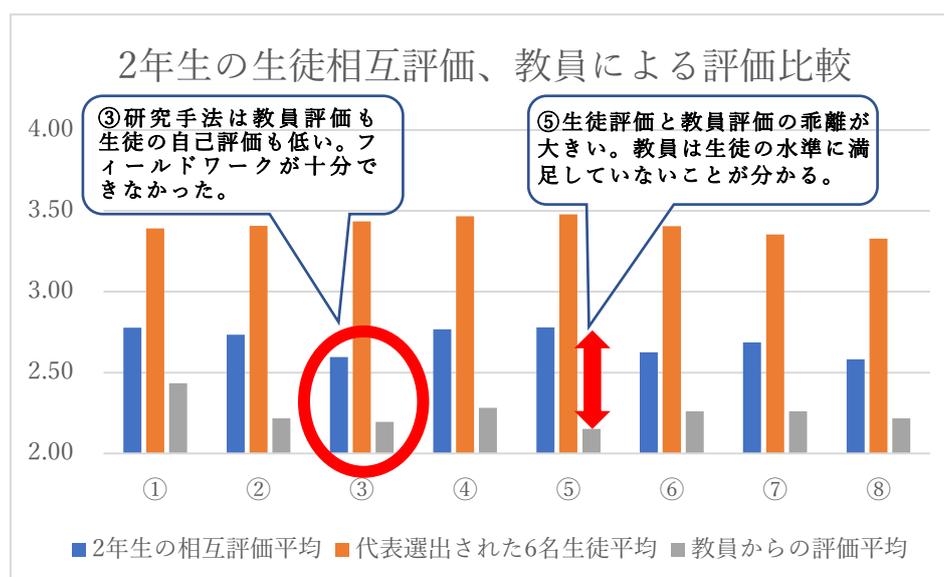
⑤ 研究のレベル ⑥ 発表態度 ⑦ 分かりやすい論理性 ⑧ 伝える工夫

#### ウ 高2ルーブリックの集計まとめ

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
(ア) 生徒	2.78	2.73	2.60	2.77	2.74	2.63	2.69	2.58
(イ) 教員	2.43	2.22	2.20	2.28	2.15	2.26	2.26	2.22

(ア) 生徒…分科会に参加した生徒(最大27名)どうしの相互評価の平均値

(イ) 教員…分科会に参加した教員(各分科会に2名程度)からの評価の平均値

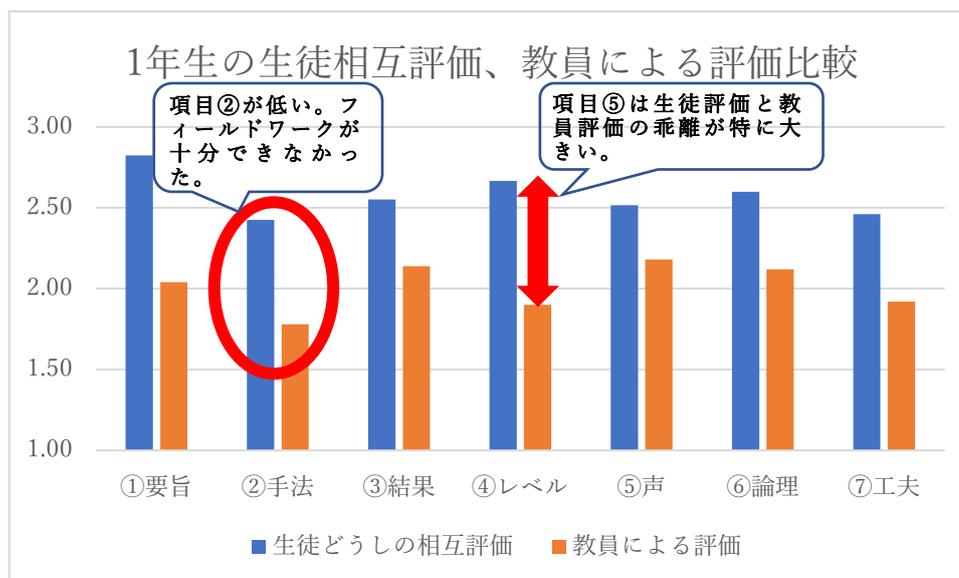


エ 高1 ルーブリックの集計まとめ

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
(ア) 生徒	2.83		2.43	2.55	2.67	2.52	2.60	2.46
(イ) 教員	2.04		1.78	2.14	1.90	2.18	2.12	2.02

(ア) 生徒…分科会に参加した生徒（最大27名）どうしの相互評価の平均値

(イ) 教員…分科会に参加（各分科会に2名程度）した教員からの評価の平均値



(2) ルーブリック集計結果の分析

ア 生徒同士の評価で最も高かった項目は①ポスターの見やすさ

①から⑧の八項目のうち、①ポスターの出来栄が、生徒の相互評価(2年2.78、1年2.83)と最も高い数値を示した。

(考察) 教員からの指導は勿論、歴代先輩の制作したポスター例を見る機会に恵まれた。教員も、昨年度に大学から専門家を招いてポスター制作の教員研修を行った。その成果があったかもしれない。

イ 最も低い成果にとどまったのは③「研究手法」

2年生徒2.60、2年教員2.20、1年生徒2.43、1年教員1.78と最も低かった。

(考察) フィールドワークが思うようにできなかった。そのような中でも、実験で地道なデータをとった生徒や、アンケート調査を Google フォームを使って行った生徒、画面対話型アプリの Zoom、メッセージアプリを使って大学生たちにメンターに入ってもらって研究するなど、“アフターコロナ”に合った新しい研究手法も生まれてきた。しかし、文献調査の内容のみ(4段階のうち最も低いレベル1の水準)どまりの生徒が多かった。

ウ 項目⑧の「伝える工夫」も低い値を示した。

(考察) チーム研究から個人研究となったこと、多くの生徒が制約時間内に原稿を読み上げる形式ばかりで代わり映えが少なかった。例年のような、惹きつけるイントロを工夫したり、寸劇を演じて伝えたりする等「伝える工夫」を凝らした生徒は確かに少なかった。しかしながら、代表に選ばれた6名の生徒のように、伝える熱意や入念な研究ぶりで聴衆を惹きつけて高く評価された生徒もいた。

エ 生徒の相互評価力は妥当性があることを示した

- ・確かに教員による評価は、生徒同士の評価よりも数値がシビアに出た。しかし、各分科会で生徒の相互評価で代表に選ばれた生徒の顔ぶれは、各分科会で教員が代表にふさわしいと選んだ生徒と一致した。生徒の相互評価力は、概ね客観的で妥当性があると評価できる。
- ・2年生の数値が1年生よりもすべての項目で高い  
全体として2年生の研究は1年生よりも素晴らしく、さすが上級生という結果である。
- ・教員による評価と乖離が最も大きかった項目  
⑤の「研究水準」である。2年生の生徒平均は2.74だが教員による評価は2.15と逆に最も低い項目となった。1年生の生徒平均は2.67と2番目に高い教員による評価は8項目の中で高い方に位置するが、教員による評価1.90どまりであった。

### (3) ルーブリック開発の成果と課題

ア 成果

ルーブリックは、年度初めに生徒に配布して事前提示することで、探究学習を取り組むとどのような力を身に付けることができるのか、「課題研究に取り組む意義」を理解させることができる。生徒が目標を理解しながら探究学習に取り組めるのもメリットである。ルーブリックを吟味することで、自分の強みはここだな、この項目がまだ弱いから改善しよう、などとメタ認知の力を育成することができる。上記で示した本校生徒の自己評価、相互評価が客観的で妥当性があるのは、ルーブリックをまめに使って吟味してきたからであると考ええる。

イ 課題

本校のルーブリックは、先進校や大学の担当者にも学びながら、基本的には本校の担当教員が自作、改善してきたものである。今後は、課題研究でどのような力を伸ばしたいか、SDGs 解決のためにはどのような力を伸ばすべきなのか等について、生徒に考えさせたり、教員と生徒が一緒になって考えて作る、という活動も面白いのではないかと考える。現在まさに生徒の行っている研究の中にそのような研究がある。SGH 指定期間終了後も、生徒の研究や意見も採り入れながら、さらにルーブリックを活用したパフォーマンス評価法の改善を進めていきたい。

### 3 クリティカルシンキングの項目反応理論(IRT)に基づく試験による評価

#### (1) はじめに

現代社会を生き抜くには、クリティカルシンキングは不可欠になってきている。クリティカルシンキングとは、先入観に囚われず、論理的に考え、合理的な決定を導き出す能力と意思である(若山 2009)。そこで、本校では中学1年から高校1年まで、4年間 CTP(Critical Thinking Program)の授業を実施している。例えば高校1年の1学期には「クリシン基礎」で国数理社4教科でクリティカルシンキングの授業を行い、2学期には「クリシン応用」で日本語ディベートを行っている。特にディベートでは、それまでに学んだクリティカルシンキングの基礎・考え方を日常の問題に当てはめて論理的に議論することで、実践力を身につけている。加えて、学んできたクリティカルシンキングを、学内で行う課題研究等で活かすことによって、さらなるクリティカルシンキング力の向上を目指している。

#### (2) 目的

生徒のクリティカルシンキング力を伸ばすために、加えて、その教育効果を確認・報告するために、本校の生徒のクリティカルシンキング力を正確に測定することを目的とする。

#### (3) 方法

教育効果を測定するためには、複数の等質テスト(同じ尺度で測れるテスト)が不可欠になる。このため、異なる試験でも同一の基準で評価できる項目反応理論(IRT)を活用する。そこでここ数年間、帝京大学法学部教授の若山昇氏のグループが開発したクリティカルシンキングの能力試験(若山他 2017)を実施してきた。このシステムは、学生のクリティカルシンキング力を大変に精度よく測定できるので、生徒個人の能力値の確認、教育効果の確認、加えて、本校生徒の能力値の経年変化をも分析可能であり、これらを行う。

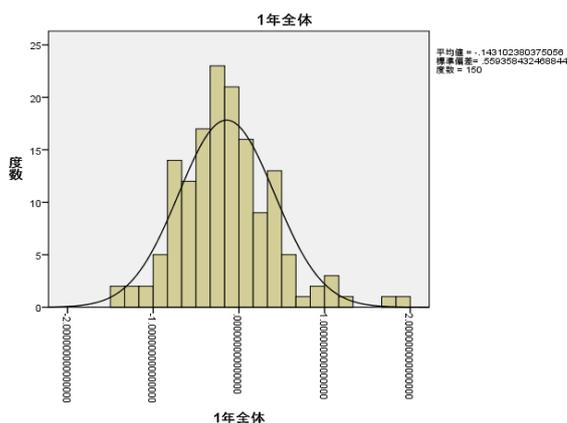
高校1年は、2020年6月および翌年1月に、2年生には2021年1月に全員を対象に、学校設定科目「グローバル情報」の授業として、本校のパソコン教室で実施した。本試験は「グローバル情報」の教科担任の監督のもとに実施しており、Webテストで心配される受験中の不正行為はなかった。

#### (4) 結果

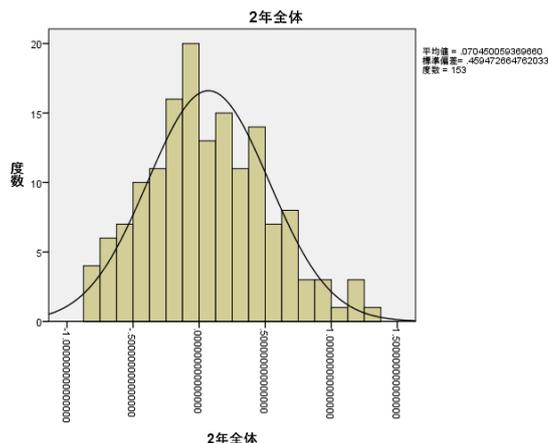
毎年1月に行っているクリティカルシンキングの能力テストの結果は以下の図表などに示すとおりである。結果の数値の単位は標準偏差であり、大学生の平均を基準に算出している。したがって、いわゆる一般の偏差値に換算するには、大学生の偏差値相当(換算値)＝(結果の数値)×10+50、となる。

	1年生	2年生	2年生の過去 1年間の伸び
2017.02	-0.142		
2018.02	-0.153	0.057	0.20
2019.01	-0.103	0.050	0.20
2020.01	-0.069	0.067	0.17
2021.01	-0.143	0.070	0.14

as of 2021.01.31



1年生の成績分布



2年生の成績分布

なお、1年生のみ行った6月の試験は、受験者153人で平均は-0.379であった。

## (5) 考察

①1年生：2020年6月平均値-0.379、翌年1月平均値-0.143、したがって7ヶ月間の伸びは+0.236ポイントである。これは、その後の1年間の伸び(0.14~0.20)より大きく、高校初年次の教育効果が明確に示された。さらに1月の能力値の平均-0.143は、当校の高校1年の平均値が大学生平均値を僅かに下回る程度であることを示している。6月には大学生平均値以上の生徒は14.4%(22/153)だったが、翌1月には34.7%(52/150)と上昇した。つまり1年次の6月~翌1月までの7ヶ月間の高校生活により、大学生に匹敵するクリティカルシンキング力を獲得した生徒は2倍以上に増えたことになる。これは、教員が経験的に感じている教育効果が、定性的な説明ではなく、具体的に定量的な数値変化として確認されたことになる。

②2年生：1月平均値+0.070、つまり、本校生は2年の1月までに、過半数の生徒が大学生平均能力値を上回るクリティカルシンキングの能力を身につけていることが示された。この過去の1年間でも、0.14の伸びを示した。これは、若山氏によると「明らかに大きな伸び」であるとのことである。最近5年間のデータから、学生は1年間に平均で0.14~0.20の伸びを示している。単純計算では3年間に0.42~0.60(偏差値換算で4.2~6ポイント)の伸びに相当する。

## (6) おわりに

本校では、SGH導入により本校の教育活動では、クリティカルシンキングの能力の向上に注力している。その結果がこの能力テストで示されており、1、2年生とも順調にクリティカルシンキングの能力が伸びていることが統計的に把握でき確認できた。つまり、これをもってSGH導入の教育成果が説明できたと考えられる。生徒の向上と教育成果が、定量的に可視化できたことは、教育者としては大変喜ばしい限りである。

### <参考文献>

若山昇 (2009) 大学におけるクリティカルシンキング演習授業の効果、大学教育学会誌、31(1)、pp.145-153

若山、宮澤、梶谷、植野 (2017) クリティカルシンキング能力測定のための項目反応理論に基づいた尺度開発、教育システム情報学会、2016年度特集論文研究会、研究会報告、31(7)、pp151-158

## 4 授業評価

- (1) 目的 生徒からの授業評価を参考にして授業改善を行う。また、本校のSGHの取組である「授業のシンカ」が進んでいるかどうかの指標の一つとする。
- (2) 日時 第1回：令和2（2020）年7月、第2回：令和2年12月

(3) 実施方法 マークシートにより回答する。意見がある場合には自由記述欄に記入する。

(4) 評価方法 教科目ごとに以下の項目を5段階（5～1）で評価

- ①生徒の意欲的な取組
- ②授業のわかりやすさ
- ③学力（技術）の向上
- ④授業の満足度

5（はい）、4（どちらかといえば、はい）、3（どちらでもない）、2（どちらかといえば、いいえ）、1（いいえ）

(5) 調査結果

<各教科目の授業評価>

- ・各授業者が自らの授業改善を図る。
- ・各学年とも各教科目の5段階の分布から平均値（加重平均）を算出する。

例) 5 (20%)、4 (30%)、3 (40%)、2 (10%)、1 (0%) であった場合

→加重平均 $(5 \times 0.2 + 4 \times 0.3 + 3 \times 0.4 + 2 \times 0.1 = 3.6)$

<全体の授業評価>

- ・各学年の項目ごとに上記の平均値の平均（総平均）をとって比較する。

(6) 分析結果の概要

すべての項目について、総平均が肯定的な評価である4.0以上の数値であった。今年度も、高1と高2の総平均が他学年と比べて低い傾向が出てしまった。3つの項目において、1回目よりも2回目のほうが低い値となってしまった。

①生徒の意欲的な取組

中学校、高校ともに、すべての学年で高い数値となった。昨年度の総平均4.3から4.5へと上昇し、生徒はより意欲的に取り組もうとしている。

②授業のわかりやすさ

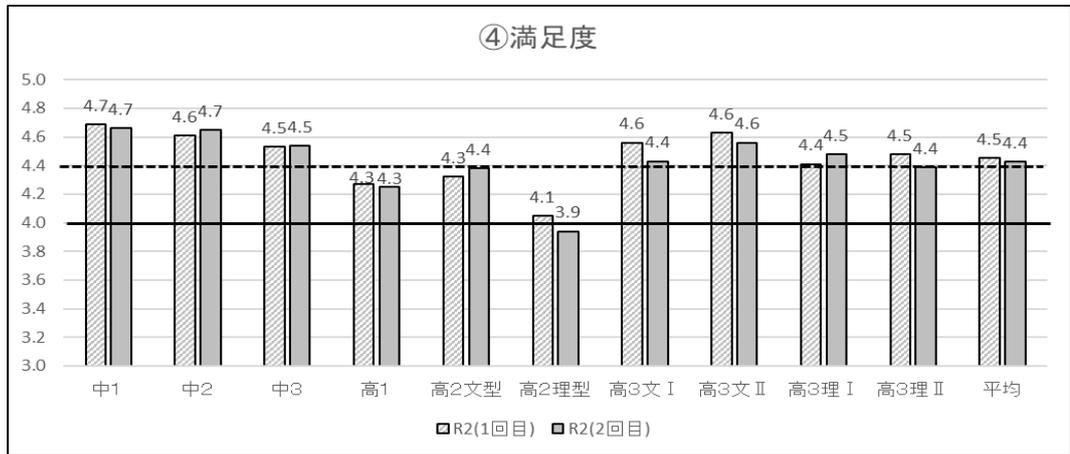
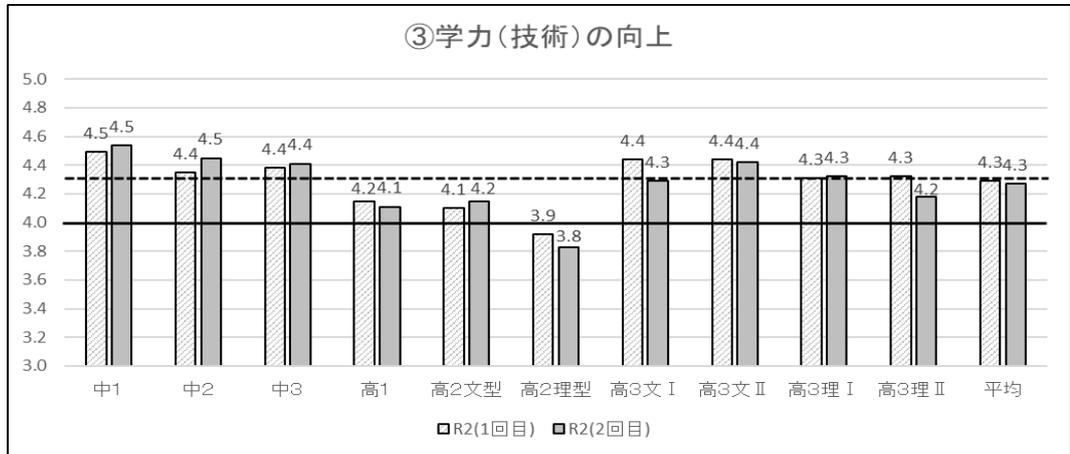
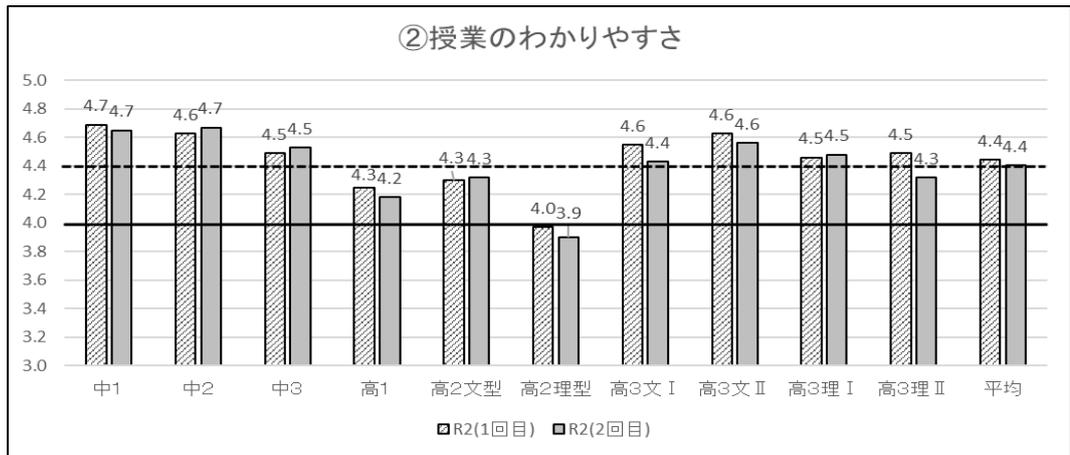
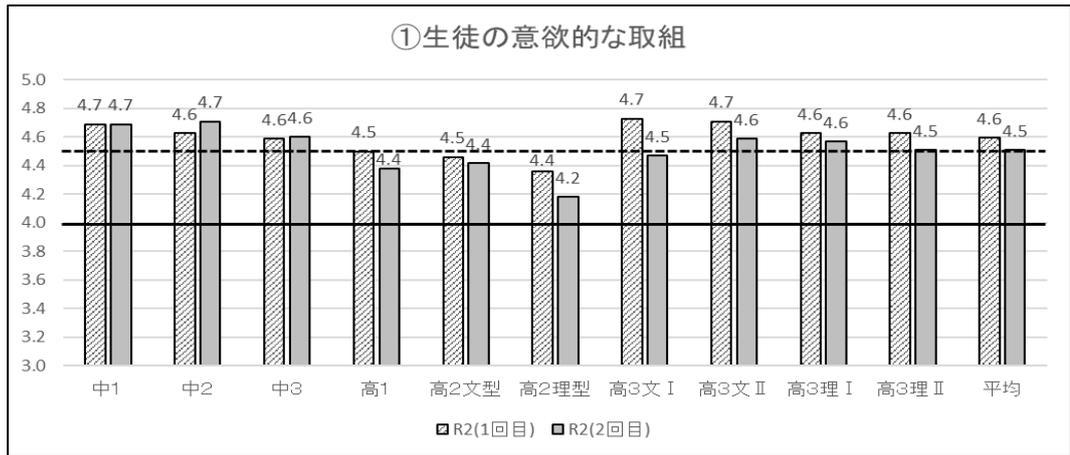
総平均は4.4とわかりやすい授業が行われている。昨年度の総平均4.1から上昇した。高2理系の平均は、昨年度3.9、今年度4.0→3.9という値で、あまり変化がみられなかった。さらに各教科目で見ると、特定の教科目において厳しい評価があるため、授業研究等を行い授業改善していく必要がある。

③学力（技術）の向上

総平均が4.3であり、全体的に学力（技術）の向上が実感したという結果であった。昨年度の総平均3.9であったので、上昇幅が一番大きかった項目となった。高2理系の平均は3.9→3.8という値であるが、昨年度の平均は3.6→3.7であったため若干の上昇がみられた。

④授業の満足度

昨年度の総平均が4.1であったが、今年度は4.5→4.4と上昇した。授業のわかりやすさ、学力（技術）の向上と相関が高い項目であるので、わかりやすさを追求し、学力（技術）を向上させながら、満足度も更に高めていきたい。



## 5 学校評価

(1) 目的 本校の教育活動全般に対する取組について、保護者・生徒から評価していただくことで、学校運営の望ましい在り方・進め方の工夫と改善を図る。また、SGH活動の成果等に関する検証材料とする。

(2) 実施時期 令和2（2020）年11月

(3) 実施方法 保護者・生徒対象に、マークシートにより回答する。意見がある場合には自由記述欄に記入する。

(4) 回答数 【保護者】

中学校（1年103名、2年103名、3年102名）回収率98.4%

高等学校（1年137名、2年146名、3年128名）回収率90.2%

【生徒】

中学校（1年104名、2年101名、3年98名）回収率96.2%

高等学校（1年150名、2年157名、3年139名）回収率97.4%

(5) 調査結果 次頁

(6) 分析結果の概要

【保護者】

今年度の回収率において、中学校は前年度と変わらず98.4%と非常に高い。高校は、81.5%→90.2%と約9ポイントも上昇した。コロナ禍という状態の中で学校に興味・関心がより大きかったのではないかと思われる。

①全体として

高校では、肯定的な評価で9割を超えるものが、全12項目中8項目となり、前年度より1項目増えた。また、7項目において前年度より数値が上昇した。中学校では、肯定的な評価で9割を超えるものが、全12項目中10項目であり、前年度同様と高い値である。また、7項目において前年度より数値が上昇した。

これは、本校の教育活動全般や教職員の指導において、保護者から指示していただいていることが示されている。高校では特に項目「5生徒指導や個々の悩みの相談、面接に熱心に取り組んでいる」「8部活動や生徒会活動は活発である」の数値の上昇が目立った。中学校では項目「9学習をする施設・整備が整っている」が大幅なポイントアップであった。これは特別教室にもエアコンを設置したことやICT機器の活用の影響と思われる。

中学校・高校ともに数値が下がった項目が「11生徒の活動や実績を保護者や地域住民に熱心にPRしている」である。これは、コロナ禍の影響で、1日体験学習、授業参観や発表会等が中止になり、PRする機会が失われたからと推測される。

②SGHに関連の深い項目について

項目「10国際的に活躍できるグローバルリーダーの育成に取り組んでいる」において、高校92%、中学校98%という高い数値となった。表1は項目10における肯定的評価の経年変化である。SGHアソシエイトになったH27から中学・高校ともに増加傾向となり、高い数値を維持している。本校におけるSGH活動が広く保護者に認知され、高く評価されていることが分かる。

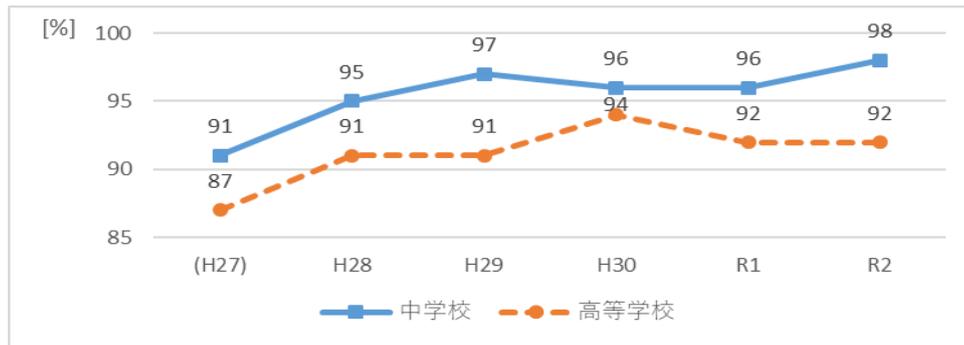


表1 項目10における肯定的評価の経年変化

【生徒】

生徒の学校評価においては、今年度から新たに実施した。過年度比較ができないため、保護者の学校評価との比較を行った。全12項目において肯定的な評価で9割を超えるものが、高校では4項目、中学校ではすべての項目であった。生徒と保護者の各項目における数値の比較は次のとおりである。

【生徒】 > 【保護者】

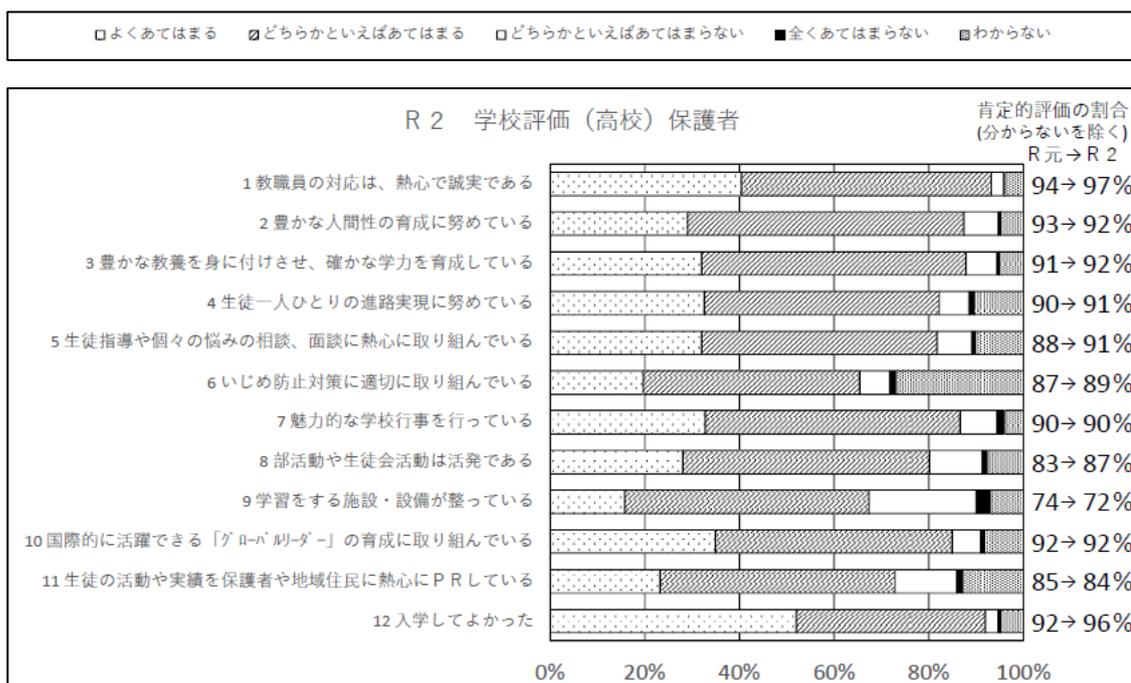
中学校：7、8、9、11      高校：1、4、5、9

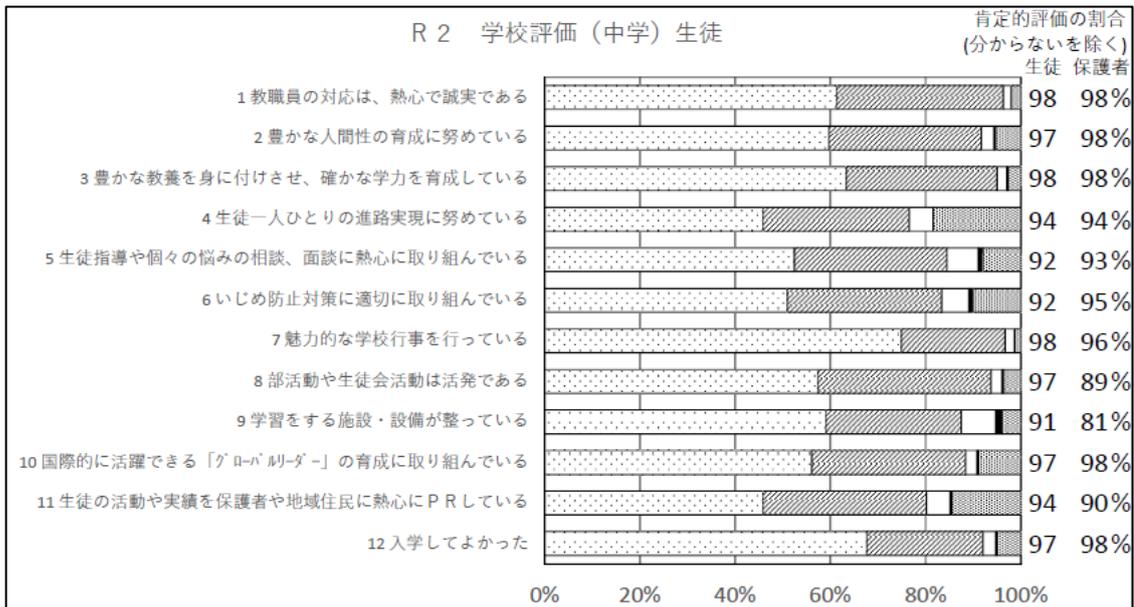
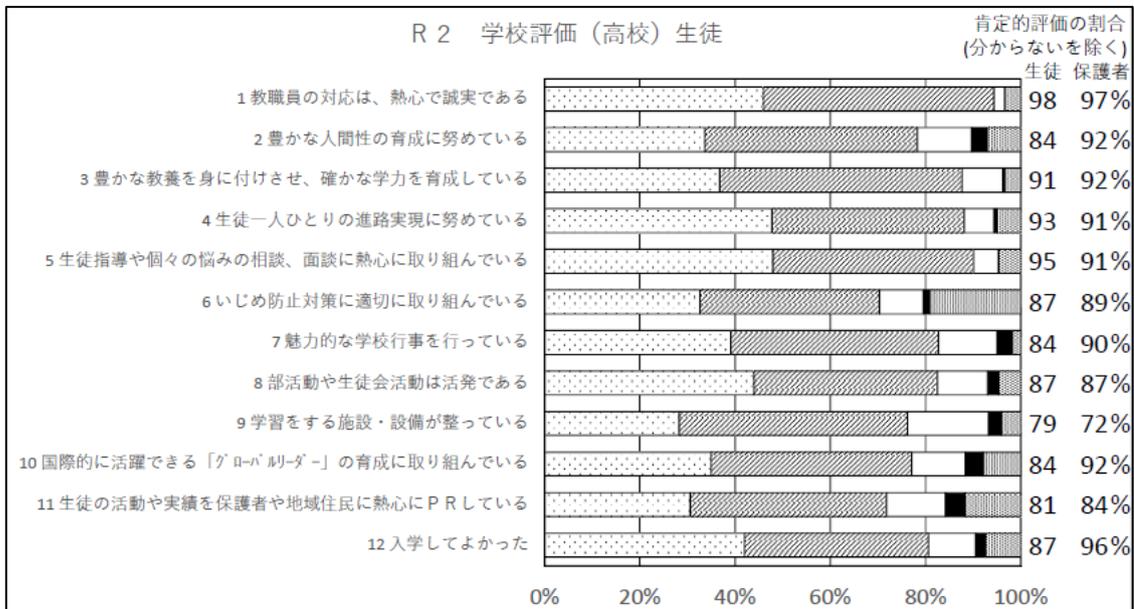
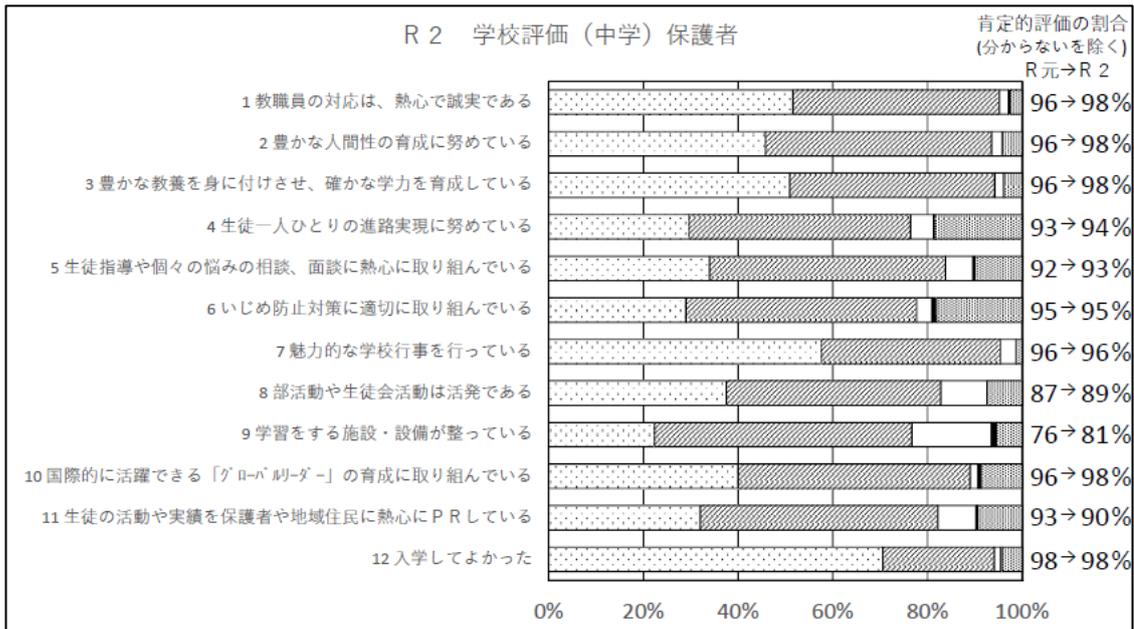
【生徒】 < 【保護者】

中学校：2、5、6、10、12      高校：2、3、6、7、10、11、12

網掛けをした項目は、保護者と生徒における数値の乖離が5ポイント以上のものである。中学校では2項目、高校では5項目あった。中学校、高校ともに共通した項目「9 学習をする施設・設備が整っている」においては、実際に教育活動をしている生徒の数値が保護者の数値を大幅に上回った。SGHの活動で活用しているタブレット端末などのICT機器の活用が評価された可能性がある。SGHに関連の深い項目10が、高校において保護者よりも生徒の数値が8ポイントも低くなってしまった。コロナ禍により本年度の活動がほとんどできなかった影響が大きいと思われる結果となった。

[調査結果] 棒グラフは左から順番に次のとおりである。





## 6 目標設定シートの到達度

### (1) 目標設定シートの成果目標の達成率

目標設定シートにおける評価項目は、以下の14項目である。

1. 本構想において実現する成果目標の設定 (アウトカム)		H28	H29	H30	R1	R2	目標 値 (R2)	達成 率 R2
a	自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数	30	40	127	155	69	60	<b>115%</b>
b	自主的に留学又は海外研修に行く生徒数	54	58	54	143	0	60	<u>0%</u>
c	将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合	64%	59%	47%	56%	52%	80%	<b>65%</b>
d	公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞数	16	23	20	24	35	20	<b>175%</b>
e	卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合	15%	35%	26%	44%	37%	30%	<b>123%</b>

2. グローバルリーダーを育成する高校としての活動指標 (アウトプット)		H28	H29	H30	R1	R2	目標 値 (R2)	達成 率 R1
a	課題研究に関する国外の研修参加者数	49	210	194	200	0	200	<u>0%</u>
b	課題研究に関する国内の研修参加者数	160	319	310	303	311	311	<b>100%</b>
c	課題研究に関する連携を行う海外大学・高校の数	3	4	5	6	6	6	<b>100%</b>
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ人数 (人数×回数)	200	220	209	168	127	270	<u>47%</u>
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ人数 (人数×回数)	150	160	393	350	65	100	<b>65%</b>
f	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数	26	30	131	102	135	30	<b>450%</b>
g	帰国・外国人生徒の受け入れ者数 (留学生も含む。)	16	13	132	10	0	20	<u>0%</u>
h	先進校としての研究発表回数	5	6	20	11	12	5	<b>240%</b>
i	外国語によるホームページの整備状況	○	○	○	○	○	○	○

(2) 成果（未集計の2項目を除く全12項目）

(ア) 7項目が目標値の100%をクリアしている（表1の達成率の数値：太字・網掛け）。

(イ) 5項目が目標値の100%未満である（同：下線）。

そのうち3項目が達成率0%である（海外活動ができなかったため）。

確かに海外活動が全くできなかったため、達成率を大きく下げた項目が現れた。達成率が0%となった項目が3項目もあった。しかしながら、オンラインを活用することで、新しい教育活動の境地も開かれたこともまた事実である。課題研究学習においてもオンラインの活動が、学校教育の中へ当たり前に入ってくるようになった。2.cの「課題研究に関する連携を行う海外大学・高校の数」は昨年度、今年度ともに6校と数字の上で変化はないが、連携校は変わった。すなわち、昨年度まで連携していたマレーシアや台湾、カナダの大学や高校を現地訪問できなくなった一方で、オンラインでヴェトナムやマレーシア、スリランカなどの学校と協働、交流を実現することができた。

さらに、1.dや2.fは、コロナ禍の中で外出や旅行が禁止・自粛される中で、本校はむしろ5年間で最高の数値となった。その理由の一つ目は、オンライン形式で行う大会・学会が増えたため、遠方までの交通費・宿泊費や時間をかけずに容易に参加できるようになり、本校生徒の応募数が増えたためである。二つ目は、かつ全国の高校生ともオンラインで協働研究を継続的に行うことが可能となり、研究の質も深まった結果ということである。

2.dについては単位が「人数×回数」である。そのため、この項目は高校生が、大学教員や学生と、大学訪問したり高校に来校して頂いたりして参画することを想定していると思われる。コロナ後の本校は、御協力頂ける大学生にチューターになって頂いてオンライン上で恒常的に指導助言、ディスカッションをして頂くことを実現した。これもまた、新しいニューノーマルな教育の在り方を実現した成果として指摘したい。

1.eの「卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1~B2レベルの生徒の割合」は英検とGTECによるCEFRのB1~B2レベルの生徒数が最大となった昨年度に続いて良好な数値である。三密に配慮した校内体制も整い始めた2学期後半からは、ペアワークやディベートなどの活動も再開でき、speakingの力を含む、総合的な英語力がついてきたといえる。

(3) 課題

1.cの「将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合」は目標値を80%としたが、昨年度に引き続いて50%台にとどまった。ただ、本項目については昨年度、地方公立の一高校としては目標値自体が高い設定だったと本校は総括した。よってこの数値は昨年度に引き続いて妥当と考える。

オンラインの成果について先に触れた。しかしオンラインには限界も感じた。対面交流による人間的なふれ合いが、人間の成長や変化には、やはり欠かせないのである。1.a、1.d等の項目について数値が下がったのは、やむを得ないことと考える。

これを目標値にするには、管理機関やAFSなどの外部団体との連携をさらにはかっていく必要がある。

“ニューノーマル”な協働学習の長所を活かすためには、学校や地域のウェブ環境の整備も課題である。コロナ禍を踏まえ、大学生チューターの枠組みも実現したいと考える。さらに、オンライン活動は、佐野高校という枠組みだけで考えるのではなく、佐野・足利のような広域連携という視点からも、進めていきたい。

ふりがな	とちぎけんりつきのこうとうがっこう	指定期間	28～32
学校名	栃木県立佐野高等学校		

## 平成28年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）								
	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度	目標値(32年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
a	SGH対象生徒:		30人	40人	127人	155人	82人	60人
	SGH対象生徒以外:		人	30人	人	人	人	人
目標設定の考え方: ボランティア活動等に主体的に取り組む生徒を育成し、現在の約2倍の生徒が校外において社会との関わりをもつ活動に取り組ませる。								
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
b	SGH対象生徒:		54人	58人	54人	143人	0人	60人
	SGH対象生徒以外:		44人	45人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 現状では毎年40名程度が海外研修に参加しているが、それ以外に自主的に海外研修に参加する生徒数は1.5倍に増加する。								
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		64%	59%	47%	56%	58%	80%
	SGH対象生徒以外:		%	20%	%	%	%	%
目標設定の考え方: グローバルな視点を身につけ、卒業後の活躍の場を海外に求めようという意欲を持つ生徒の割合を80%以上にする。								
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
d	SGH対象生徒:		16人	23人	20人	24人	35人	20人
	SGH対象生徒以外:		9人	10人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 学校外に活躍の場を求める生徒を育成する。表彰者や入賞者を現在の約2倍に増やす。								
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
e	SGH対象生徒:		15%	35%	26%	44%	37%	30%
	SGH対象生徒以外:		15%	17%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 英検2級～準1級の英語力を有する生徒数を約2倍に増やす。								
(その他本構想における取組の達成目標)								
f	SGH対象生徒:							
	SGH対象生徒以外:							
目標設定の考え方:								

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度	目標値(32年度)
a	課題研究に関する国外の研修参加者数							
	0人	0人	49人	210人	194人	200人	0人	200人
	目標設定の考え方:海外グローバル研修(1年、40名)および台湾グローバル研修(2年、全員)で課題研究に取り組む							
b	課題研究に関する国内の研修参加者数							
	人	43人	160人	319人	310人	303人	311人	320人
	目標設定の考え方:1, 2学年では全員が何らかの国内(校内)の研修に参加する。							
c	課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数							
	2校	2校	3校	4校	5校	6校	6校	6校
	目標設定の考え方:連携先を開拓し研究内容の充実を図る。							
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	人	100人	200人	220人	209人	168人	127人	270人
	目標設定の考え方:課題研究班(40班)に留学生等(50名程度)が加わり、5回程度の活動が行われることから目標を設定。							
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	0人	0人	150人	160人	393人	350人	65人	100人
	目標設定の考え方:課題研究には地元の企業やJICA、JETROなどの人材が関わってくると考えられる。							
f	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数							
	0人	0人	26人	30人	132人	102人	135人	30人
	目標設定の考え方:各種大会への積極的な参加を促す。							
g	帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)							
	1人	2人	16人	13人	82人	10人	0人	20人
	目標設定の考え方:受け入れやすい環境作りを推進する。							
h	先進校としての研究発表回数							
	1回	3回	5回	6回	22回	11回	12回	5回
	目標設定の考え方:授業公開や研究授業(2回)、全体発表会(1回)、課題研究発表会(1回)、グローバル人材育成講演会(1回)							
i	外国語によるホームページの整備状況 ○整備されている △一部整備されている ×整備されていない							
	×	×	○	○	○	○		○
	目標設定の考え方:情報発信と更新に努める。							
j	(その他本構想における取組の具体的指標)							
	目標設定の考え方:							

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	元年度	2年度
全校生徒数(人)	472	473	473	470	466	462	456
SGH対象生徒数			473	470	466	462	456
SGH対象外生徒数			0	0	0	0	0

## 7 S G H運営指導委員会ならびにアドバイザー会議

### (1) 第1回運営指導委員会

ア 期日 令和2(2020)年8月18日(火)

イ 内容 第1回S G H運営指導委員会が開催された。協議の中において、運営指導委員の先生方から、「コロナ禍におけるS G H事業計画の進め方」や、「ポストS G H構想」等について、具体的で示唆に富む数々の御助言を頂いた。運営指導委員の先生方はリモートでの参加となった。

### ウ 参加者

- ・運営指導委員・リモートでの参加(敬称略)  
鈴木典比古氏(国際教養大学・学長) 池田伸子氏(立教大学・副総長)  
田尻信壹氏(目白大学・人間学部長)  
小又正高氏(あしぎん総合研究所・代表取締役社長)
- ・管理機関事務局(敬称略)  
吉川知宏(県高校教育課指導主事) 相馬学( )

### エ 協議・質疑

- (ア) 栃木県教育委員会の関係事業について
- (イ) 昨年度までの本校のS G H事業について
- (ウ) 本年度事業計画及び実施状況について
- (エ) ポストS G H構想について

### ○本年度の事業計画について(紙数の都合により抜粋)

鈴木氏：コロナ禍で佐野高校の抱える課題は他校でも同じ。例えば国際教養大学では全員1年間の長期留学が必須。相互交換制度によって全員留学が可能だったが、それができず深刻な状況。台湾、ヴェトナム等、一部の国・地域なら可能か。大学は今なお完全閉鎖でオンライン講義のみ実施。留学生は帰国できない。解決策が、見出せない。

池田氏：佐野高校のZoomだけでなくテキストでのコミュニケーションの組み合わせがとても良い。その際口頭だけでなく、長文の文章を書かせる訓練も重視してほしい。マレーシアとのやり取りの中ではファシリテーターとしての教員のサポートがしっかりしていないと、消化不良で終わってしまうことがとても多い。テーマについて事前学習を入念にさせることがポイントである。

田尻氏：オンラインは日本の教育の在り方を劇的に変えた。目白大学ではオンライン授業にしてから退学者が激減、出席率も上昇した。この授業形態をコロナ後もある程度残していきたい。オンラインの長所を活かすため、学校のウェブ環境の整備が課題である。新カリキュラムの在り方については、蓄積型学力から活用できる学力を重視する。インターナショナルバカロレアへの参加も積極的に。

小又氏：あしぎんでもZoomでの研修が増えているが、一方向になりがち。課題をあらかじめ提示し、それに回答してもらうということで、双方向のやりとりになってきた。今の若者は、理解力は高いが課題を発見する力、自ら行動する力が弱い。如何に行動力を伸ばすかが課題。進路指導は、単に有名大学に行けばいいのではなく、生徒の個々の個性・能力を生かす視点での指導をお願いしたい。

○ポストSGH構想について（議事録から。紙数の都合により抜粋）

鈴木氏：オンライン教育が学校教育の中へ、当たり前に入ってくるようになる。そのような中で、学校としてどのような特徴を出していくかが求められる。大学・高校の在り方もオンラインで変わっていく。高校は知識の習得に加えて、人間教育を併せて学ぶ場である。

池田氏：「幸せな学校を作ろう」という時の「幸せ」な人たちとは誰のことなのか。自分が幸せになるということは、他者も幸せにならなければならない。ローカルからグローバルへという視点を大切に、自分、地域、国内、世界のSDGs解決のため、中等教育では世界のどこへいっても通用する汎用的な力を育ててもらいたい。例えば大学より中学・高校のほうが、人とのコミュニケーションの力は培われる。SGHでつながった海外との日常的なコミュニケーションを続けてほしい。

田尻氏：大学入試が目的化して、入学後伸び悩む学生が多い。SGH事業で培った教科横断的なカリキュラムを、新教育課程の中でもぜひ生かしてほしい。学ぶことに疲れず、大学入学後に大きく伸びる生徒を育ててほしい。短期的展望としては、県教委には今後も佐野高校を県として支援して行ってほしい。長期的にはSGHの成果をどう継承していくかが課題。オンライン授業は、佐野高校という枠組みだけで考えるのではなく、佐野・足利広域連携を期待したい。ただオンラインでは人は変えられない。オンラインの学びとともに、対面型授業も充実していかなければならない。

小又氏：若者には、地域をよくするという気持ちをもってもらいたい、という願いがある。魅力あるふるさと、戻ってきたいと思う佐野市を作っていく人材育成を求める。佐野に戻ってくる人が増えてきているということだが、地域に戻ってくる人に、「なぜ戻ってきたのか。」をたずねてみてほしい。

他の先生方のおっしゃる探究力・人間力については、私もまったくその通りと思う。ぜひ追求して行ってほしい。

(2) 運営指導委員会第2回

ア 期日 令和3(2021)年3月3日(水)

イ 1, 2年成果発表会と同日、発表会終了後に、上記委員会を開催した。

ウ 参加された運営指導委員

小松 俊明 氏 (東京海洋大学・グローバル教育研究推進機構・教授)

松金 公正 氏 (宇都宮大学・国際学部教授)

鈴木典比古 氏 (国際教養大学・学長)

池田 伸子 氏 (立教大学・副総長)

田尻 信壹 氏 (目白大学・人間学部長)

小又 正高 氏 (あしぎん総合研究所・代表取締役社長)

エ 議事

① 今年度の事業報告について

② 1年間の活動について

③ SGH成果発表会について

④ 次年度以降について

## 8 5年間のまとめ

### (1) グローバル人材の育成

佐野高校は、平成28年度にSGH指定を受ける前から『国際人として活躍できる真のリーダー』の育成を教育目標としてきた。その教育活動がSGHにより加速されたと言える。中1から高3までの6年間にわたる探究プログラムは、多くの支援者の元、自ら考え自ら動く佐高生を多く輩出してきた。地元の社会課題を考えることは地球規模の課題を考えることにつながることも多く、まさにロールモデルである田中正造翁の後を追ひ、グローバルリーダーたらんと邁進してきた5年間であった。

### (2) 柱となった総探の課題研究、そしてその先頭を走るSGHクラブの活躍

全校生徒が課題研究に携わり、自分を当事者として社会問題に取り組むことができた。普通教科の学習とは異なるところも多くあり、5年間プログラムを実践してきたとは言え、教員、生徒ともに未知な部分があるのも事実である。しかし、振り返ってみると、生徒たちは自分たちでいろいろな課題を見つけ、挑戦してきた。たとえば、まちおこしに関しては佐野市の特徴となっている「クリケット」を使い人を呼び、さらに異文化理解につなげようとした。あるグループは外来魚の問題を扱い、魚粉を作成し植物を育てた。外来魚を自分の部屋に置いたままにし、母親から臭いにおいがすると怒られた者がいた。面白いエピソードである。このように、一人ひとりが自分の課題として真剣に取り組む姿は、素晴らしいものである。そして、その研究成果を自分の進路とうまく結びつけ総合型選抜等で大学合格を勝ち取った者も多く出てきた。

さらに、SGHクラブは、総探の課題研究の活動を進歩させたものであり、課題研究はどのように進んでいったらよいかを示してくれた。その成果が2019年2月に行われた第3回関東甲信越静地区高校生課題研究発表会プレゼンテーション日本語部門金賞にも表れている。また、このコロナ禍でマレーシアの学校と協働研究、合同発表会を実施したことにも表れている。

また、本校の特徴であるSGHクラブディベート班は、毎日の地道な活動をベースに様々な大会に挑んで来た。それと同時に県内の高校にディベートを普及させる役割も大いに果たしてきた。その大きな成果として2020年12月に行われた第15回全国高校生英語ディベート大会で5位に入賞したことは記憶に新しい。また、フランス語班も東日本規模のコンテストに参加し、審査員特別賞(5位)を獲得し、活躍の場を広げた。

### (3) 最後に

この5年間に多くの外部の方々が生徒と関わり、生徒の成長を支援していただいた。これは学校として大きな財産になっている。その方々に感謝の意を表したい。課題研究は学校外の方々の援助に大きく頼っている所がある。その方々を大切に、今後もよい関係性を維持したい。

また、このSGHに関わった教職員の方々にも感謝したい。粘り強い指導や入念な準備など様々な努力があつてこの5年間のSGHが終わろうとしている。

佐野高校SGH構想は、Sanoグローバル構想と変わり、さらに発展を見せる。5年間で蓄積されたSGHのノウハウを生かし、今後は**グローバルリーダー**の育成に尽力していく。